



# 歯学部ニュース

令和3年度第2号（通算140号）

特集 歯学部卒業おめでとう  
歯学部学生の様子  
Beyondコロナ



# 目次

特集1 歯学部卒業おめでとう	1
学部長から 前田 健康	
副病院長から 小林 正治	
卒業生から 小林 邑生・安野 綾夏・岸本 奈月・長尾理紗子・濱元 陽香	
令和3年度 歯学部卒業生名簿	
大学院修了にあたり	10
真喜志佐奈子・吉田 謙介	
令和3年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名	
臨床研修修了にあたり	13
永島 和裕・小林 水輝	
教授に就任して	15
富原 圭	
総務委員会だより	16
前田 健康	
特集2 歯学部学生の様子	19
中澤 夏希・山崎 葵偉・赤峰 沙夜・柳館 快利	
高橋 侑里・川上 紗樹・須藤 悠大・佐伯 唯衣	
部活動紹介	27
バドミントン部 山内 瑞起・剣道部 高井 勇典	
特集3 Beyondコロナ	29
尾崎 紀子・高山 玲奈・中村 夢衣・鈴木 志歩	
早期臨床実習を終えて	34
柏瀬 莉緒・東 七愛・水上 大河・近藤 風希	
ポリクリを終えて	37
佐藤 大地・花森 玲奈	
素顔拝見	39
佐藤由美子・高嶋真樹子・曾我麻里恵・大森 裕子・笹川 祐輝・那小屋公太	
吉原 翠・松本明日香・鈴木 絢子・日吉 巧・永田 量子	
留学生紹介	49
Kridtapat Sirisereephap (Joke)・Tin Zar Tun	
Ma. Therese Blanche Sta. Maria	
論文紹介	59
泉 健次	
学会受賞報告	61
竹中 彰治・枝並 直樹・長澤麻沙子	
真柄 仁・依田 浩子・平山 悟	
診療支援部だより	67
坂本裕里子	
新潟歯学会報告	68
辻村 恭憲	
同窓会だより	69
野内 昭宏・小澤 賢一	
ミニコラム	71
歯学部を支える方々 丸山 俊・土田 彩乃	
教職員異動	73
編集後記	75





## 卒業を祝して

歯学部長 前田 健康

歯学科第52期生の皆さん、口腔生命福祉学科第15期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。本日めでたくご卒業される皆さんに、歯学部教職員を代表して、心からお祝い申し上げます。また、保護者をはじめご家族の皆様におかれましては、今日の卒業式を無事に迎えることができましたことを心よりお祝い申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の予防についてさまざまな対策が取られる中、歯学部教育の総仕上げといえる臨床実習、現場実習を終了し、卒業生の皆さんは私ども新潟大学歯学部が卒業生に求める能力を獲得し、本日、学士の称号を与えられました。この春から、歯科臨床研修医、歯科衛生士、福祉職、行政職、大学院への進学等、さまざまな道に進まれます。各人の進む道は異なるものの、歯科医学・医療、口腔保健・福祉に携わり、国民の健康の維持・増進に寄与するという皆さんの目標は同一であると思います。

我が国は超高齢社会を迎え、2020年には総人口に占める高齢者（65歳以上）の割合は28.7%となり、過去最高となりました。また75歳以上人口（後期高齢者）の割合は14.9%、80歳以上人口も9.2%にも達しています。国連の推計では、2050年までに日本の100歳以上の人口は100万人を突破する見込みです。このような人口構造が変化するとともに社会構造も変化し、医療に求められる社会ニーズも大きく変化しています。

この変化に対応するために、皆さんは社会に出た後も職業人としてのスキルや知識を深化させていくことが求められるでしょう。皆さんが新潟大学歯学部で4ないし6年間で学んだことは、今こ

の時代の医療技術、社会ニーズをベースとした教育プログラムに基づいたものです。この先技術革新、社会構造の変化が進めば、その時代に求められるスキルや知識も当然変わっていきます。「大学卒業＝学びのステージの終了」ではありません。この先も学び、社会人としての成長と進化を続けましょう。変化し続ける社会ニーズを敏感にキャッチし、それに応えられる社会人であり続けましょう。歯科医療・口腔保健従事者という職業を真摯に受けとめながら、プロとしての自信と勇気を持って、社会に対して積極的に貢献することを目指してください。

社会に出た後も学び続ける、ということは容易ではありません。努力を続けることは時に辛く苦しく、弱い自分に惑わされて易きに流れたいくなる日もあるかもしれません。そんな日に思い出してほしい一節を送ります。吉田兼好（兼好法師）による徒然草の第150段に「能をつかんとする人」という話があります。原文は省略しますが、この話は「上達のために必要なことはただ1つ、初心者の中から上手な人たちの中に交じり、時に笑われ、恥をかきながら、それでも気にせず努力を続けていくことが必要です。それを出来た者だけがスキルを上達させ、最終的には人に認められるような存在（名人）になっていく。これがどんな道でも変わることのない真理である」というものです（<https://omki.com/news/archives/6811>）。すなわち、一つの道を身につけ、そして極めるには非常に難しいが続けることが大事であり、自身の道を歩むためには自分の弱さに打ち勝たなければならないのです。みなさんが卒業した



新潟大学歯学部は国民の税金により運営されているといっても過言ではありません。タックスペイヤーである国民は卒業生のみなさんに、常に幅広い教養、豊かな感性、きびしい倫理感を求め続けます。皆さんが社会から認められるために、今日の卒業式の日、これからの長い人生に向けて新たな目標を設定しましょう。そしてその目標に向かって努力を続けてください。現代の厳しい競争社会で活躍するためにはこの努力が必要です。

本日、新たな夢を胸にスタートラインに立つ皆さんを、私ども教職員一同はこれからも応援して

いきます。卒業する皆さんには、折を見て母校を訪ね、また生涯の学習の場として、これからも新潟大学歯学部を積極的に活用していただけるように願っています。皆さんが今日巣立っていく新潟大学歯学部はすばらしい教育資源を有し、国内外から高い評価を受けています。私ども教職員は皆さんに対し、これからの社会で勝ち抜くために必要な考え方、知識、技能、態度を授けてきたと自負しています。新潟大学歯学部を卒業したという誇りを持ち、活躍して下さい。皆さんの今後の活躍を大いに期待してします。







## 卒業おめでとう

医歯学総合病院 副院長 小林 正 治 (歯科担当)

歯学科第52期生ならびに口腔生命福祉学科第15期生の皆さん、卒業おめでとうございます。新潟大学歯学部すべての課程を修了され、晴れて学士の学位を授与されました栄誉をここに称えますとともに、これからの希望に満ちた未来に対して心から祝福を申し上げます。また、この日に至るまでの長い年月、卒業生を支えてこられたご家族やご親族の皆様に対し、厚く御礼申し上げますと共に、心よりお祝い申し上げます。

皆さんは、2年以上にわたるコロナ禍の中で、遠隔授業やサークル活動等の制限がなされ、様々な苦勞をし、未だかつてないストレスを受け、大きな戸惑いと困惑があったものと思います。皆さんにとって、まさに学生生活の総仕上げとなる時期に至るまで、この災禍が続いたことは、本当に残念でなりません。様々な経験や体験は、個人や社会を成長させる糧となりますが、今回の災禍の経験により社会がどこに向かうのか、未だに見通すことができません。世界中のすべての人々が、この災禍に対して向き合うことを余儀なくされています。皆さんには、社会に対して期待するだけでなく、新しい社会はどうあるべきか、どこに向かうべきかについてしっかりと考えていただき、積極的に関与していただきたいと思います。

最近、SDGs (Sustainable Development Goals) という言葉をよく耳にするようになりました。「持続可能な開発目標」とも訳されますが、持続可能な社会を目指し、地球の環境を壊さず、未来の世代も美しい地球で平和に豊かに、ずっと

生活をし続けていける社会を作っていこうという取り組みです。人はどうしても自己中心的視点で物事を考えてしまいますが、未来の社会のためには自己の行動や欲望をとときには制限することが求められます。皆さんには、自らをさらに成長させ、未来の社会を担う医療人として高い倫理観を養うとともに、身の回りにある日常と社会で果たす役割というミクロとマクロの世界観の中で、充実した人生を歩んでいただきたいと思います。

日本歯科医学会では、「歯科イノベーションロードマップ2040」を発表しています。これは、我が国の人口が2040年に約1億1000万人となり、現役世代が減少する中で高齢者数がピークを迎え、医療・介護の危機や労働者不足が予想される2040年問題に対し、歯科の革新によって日本を変えることを目指したものです。皆さんも、卒業に当たって2040年問題に対し自分がどう生きるべきか、今一度人生設計について考えてみてください。新たな時代を生き抜き、そして光り輝き続けるためにも、知的好奇心を失うことなく、一步一步努力を重ね、たとえ回り道であろうと自分が胸を張って歩める道を進んでください。チャレンジする心を忘れずに、勇気をもって困難に立ち向かってこそ、満足できる人生が送れるはずですよ。

新潟大学歯学部ならびに医歯学総合病院歯科診療部門は、皆さんの医療人としての人生をしっかりとサポートいたしますので、気兼ねなく頼ってください。大学から巣立つ皆さんが、様々な分野で活躍されることを心より願っています。



# 卒業生から

## 卒業生から

歯学科6年 小林 邑 生

毎年1年が過ぎるのが早くなったと感じていましたが、臨床実習も終盤へと近づき、現在は52期生から53期生への引き継ぎの真っ只中です。今回歯学部ニュース「卒業生から」の原稿を執筆する機会をいただきましたので、歯学部の6年間で特に思い出に残っており、また大変だった臨床実習について書かせていただこうと思います。

新潟大学歯学部では実際に患者様の治療をさせていただくことができる、全国でも数少ない診療参加型の臨床実習を行っています。私は12名の患者様を担当させていただいて、先生方にご指導いただきながらそれぞれの患者様に対して、患者様ご本人とも相談させていただきながら最適な治療方針や治療計画を立案して治療を進めていきました。そのなかで歯の被せ物や入れ歯の製作、むし歯や歯周病の治療をさせていただきました。診療を行う前には、事前に教科書や講義資料を読み返

しながらレポートを作成し、先生とディスカッションを行って準備を行います。診療を終えた後は、ポートフォリオの記載や先生にポストチェックを受け診療の反省を行い、次の診療に活かします。担当患者様の治療以外にも、各専門診療科で先生方の治療を見学しその手技を学んだことや、臨床推論の講義で一口腔単位の治療方針・計画を立案しグループ内で討議したことが、自分で考える力を身につけるためになったと感じました。

昨年に引き続き新型コロナウイルスの感染拡大により、さまざまな制限がありましたが、学生の実習に協力して下さる患者様や各診療科の先生方、大学や病院のスタッフの方々のおかげで、こうして臨床実習を最後までやり遂げることができました。

臨床実習をやりきったと感じるとともに、国家試験に対する緊張感もクラスには出てきました。臨床実習と併行して国家試験の勉強をするのはなかなか大変な部分もありましたが、これからは勉強に集中して取り組み、52期全員で合格を目指して頑張ります。



歯学部玄関にて。撮影時のみマスクを外しました

## 卒業を迎えて

歯学科6年 安野綾夏

このような表題の原稿を書かせていただくにあたり、6年間の印象深い出来事が次々と思い出され、長かったようにもあっという間だったようにも感じられます。

1年次の五十嵐キャンパスでの生活は、初めての1人暮らしで、授業スケジュールの管理などに追われ、あっという間に過ぎて行きましたが、同期や先輩方、先生方とのたくさんの出会いがあった1年間でした。早期臨床実習にて経験した患者役実習では、担当していただいた6年生がここよくて頼もしくて、遠い存在に思いましたが、今自分がその先輩方と同じ立場なのだと思うと不思議な感覚です。

2年次から歯学部での生活が始まり、専門的な講義や実習が始まりました。臨床実習を終えた今、低学年での講義の重要性を痛感しています。先生方の講義を受けることができるのは貴重な機会だったのだということに気が付きましたし、講義を聞いて得たものにより、その後の臨床実習はより充実したものになると思えました。過去の自分には、自分が実際にやることを想像して講義を受けるように、喝を入れたいと思います。

6年間の印象深い出来事の中に、歯学部バスケットボール部での活動も挙げられます。毎年夏に開催されるオールデンタルでは、決勝リーグ進出を目標に部員が一丸となって練習を重ねておりました。普段は楽しい雰囲気仲が良く、真剣にやるべきときには切り替えができる、素敵な仲間たちに恵まれました。OGやOBの先生方をはじめ、部活動を通して得ることのできた繋がりを、これからの人生でもずっと大切にしていきたいと思えます。

5年生から始まった、ポリクリ、臨床実習はそれまでの4年間で凝縮したように濃く、印象深い1年半となりました。学生の勉強のためになるなら、と3時間の診療に協力して下さる患者さん、新型コロナウイルス感染拡大の中で学生実習継続のために尽力して下さった先生方、指導に当たって下さったライターの方々の先生方、たくさんの方々のおかげで実習が行えているのだということを感じなかったときはありませんでした。数々の制限がある中、最後まで臨床実習を行わせていただけたことを幸せに思います。1年半を通して学んだことは大変多かったですし、知識だけではなく、精神的にも成長することができたこの実習によって、6年間の締めくくりを果たせたと思います。

最後になりますが、支えて下さった両親、先生方、友人、関わらせていただいたすべての方の存在があったからこそ無事に卒業を迎えることができました。この6年間は人生において必ず糧になると思います。感謝の気持ちを社会への貢献で返せるよう努力していきます。ありがとうございました。



臨床実習を共に乗り越えてきた仲間との写真です  
撮影時のみマスクを外しています



## 卒業にあたり

歯学科6年 岸本奈月

長かった学生生活が、いよいよ終わろうとしています。自分で選んだ道ですが、この歳まで学生をやっているとは想像もしていませんでした。私は本学歯学科には2年次編入で入学しましたが、大学卒業後、大学院博士課程を修了し、教員として大学での学生教育に携わり、再度大学生に戻るという、少々特殊な経歴を持っています。

私と新潟大学との関わりは、大学院に始まりです。漠然と研究がしたいという理由から口腔生命福祉学専攻に入学しましたが、本課程は社会人大学院の制度をとっているため、歯科衛生士として働きながらの学生生活でした。中にいると気付きにくいかもしれませんが、教育にかける情熱や環境、分野を超えた連携のしやすさなどは、新潟大学の大きな特色のひとつであると感じています。社会人と両立するため親身になって相談に乗り、熱心に指導してくださり、そして更には歯学科に編入したいというわがまを嫌な顔もせず聞いてくださった指導教員の先生方には、感謝してもきれません。

一度歯科専門職として働いたことで、編入してからの学生生活はこれまで臨床で行ってきたことの裏付けを改めて理解し、経験と照らし合わせて考えながら能動的に学ぶことのできる貴重な機会でした。講義から知識を得、臨床実習を通して技術を身につけ始めると少し自信につながりますが、いざ卒業して働き始めると、実際にはまだス

タートラインにも立てていなかったのではないかと気付かされます。「あの時一生懸命に授業を聞いておけばよかった」「働きはじめると、聞きたくても聞ける人が身近にいない」このような声はよく耳にしますし、実際に私もそう感じる場面は少なくありませんでした。巷にはさまざまな情報が溢れており、それらを適切に取舍選択する能力は不可欠です。したがって、大学で最先端の研究をしている専門家の生の声を聞き、疑問点を直接質問することのできる今の環境は、とても恵まれているのだと改めて感じています。

学生生活では、SSSVでのインドネシア留学やSCRIP参加など、貴重な体験もさせていただきました。加えて、昨今のCOVID-19の感染拡大の中、先生方のご尽力はもちろんのこと、感染対策をはじめ一人ひとりが自覚を持って行動した結果、一人の感染者も出すことなく、予定されていた臨床実習を完了することができたことは、本学だからこそ成し得たことではないかと感じています。何事にも真面目に取り組み、切磋琢磨し合える52期の仲間たちと一緒に過ごせた5年間は、私にとってかけがえのないものです。

学びに終わりはありません。医療の分野は日進月歩、歯科専門職として患者さん一人ひとりに合わせた適切な医療を提供するためには、日々自身の知識・技術をアップデートしていく必要があります。改めてこのような環境で学ぶ機会を与えてくださった皆さまに深く感謝しつつ、これからの歯科医療に貢献できるよう、精進してまいります。



クラスメートと撮影。撮影時のみマスクを外しました

## 卒業にあたり

口腔生命福祉学科4年 長尾 理紗子

口腔生命福祉学科への入学から4年が経ち、卒業の時期となりました。「口腔は学年が上がるにつれ忙しくなる」と入学当初から耳にしていたが、特に最終学年の1年は臨床実習、特論、就職活動、国試対策などめまぐるしい日々であったように感じます。私が高校生の頃に思い描いていたキャンパスライフとは異なりましたが、この4年間は毎日とても充実していました。

学生生活で印象に残っていることは、やはり病院での臨床実習です。実習では毎日たくさんのことを学び、予習と復習の繰り返しで他に手が回らないほど忙しいこともありましたが、座学で学んできたことと臨床とのギャップに戸惑いつつ、自身の未熟さを痛感しましたが、徐々にできることが増えていき、達成感を感じることができました。お忙しい中、丁寧に指導して下さった先生方や歯科衛生士の皆さんにはとても感謝しております。また、実習で「将来このような歯科衛生士になりたい」と思えるような歯科衛生士さんに出会うことができました。社会に出て学ぶ姿勢を忘れずに、憧れの歯科衛生士さんのようになれるように努力していきたいと思っております。

さらに4年次の福祉実習は特別養護老人ホームで実習させていただく予定でしたが、新型コロナ

ウイルスの影響で中止となり代替課題を行いました。代替課題は先輩方の実習日誌を読んで考察するというもので、施設職員の方や利用者さんから直接学ぶことのできないもどかしさを感じました。しかし、代替課題だったことで社会福祉士が現場でどのような役割を担い、どのように利用者さんに接するべきなのかをじっくりと考える時間を持つことができたと思います。私は福祉分野の法律や制度の変遷の勉強が苦手だったので、1か月間福祉に向き合うこの期間が不安でしたが、振り返ってみると講義だけでは学べないようなことを学べました。

また、私は歯学部サッカー部のマネージャーをしていました。特に2年次のオールデンタルでは1週間近く九州に滞在し、当時は「そろそろ新潟に帰りたいなあ」と思うこともありましたが今では良い思い出です。3年次からは実習の忙しさや新型コロナウイルスの影響もあり、さぼりがちになってしまいましたが、素敵な先輩と後輩に出会うことができ、サッカー部に入部して良かったと思っています。

最後になりますが、4年間お世話になった先生方や病院の歯科衛生士の皆さん、一緒に頑張ってきた口腔生命福祉学科のみんな、歯学部サッカー部の皆さんには本当に感謝しております。この4年間の経験を活かし、福祉の視点を持った歯科衛生士として日々精進してまいります。



教室にて撮影



## 卒業にあたり

口腔生命福祉学科4年 濱元陽香

卒業を前に、この2年間を振り返ったとき、本当にあっという間だったと感じるとともに、学びが多く、非常に充実していた2年間だったと感じています。私は、短期大学卒業後、コロナ禍で世間が大混乱の中、新潟大学口腔生命福祉学科に編入学しました。3年次は慣れない土地で、顔も知らない同級生たちと一緒にオンライン授業を受け、不安や物足りなさを感じることもありました。福祉の専門科目や英語など、今まで苦手としていた勉強に取り組み、新たな発見も多くなりました。また、対面授業が徐々に再開され出すと、優しく楽しいクラスメイトのことをたくさん知り、この学年が大好きになりました。4年生になると、病院での臨床実習が始まり、就職活動や特論の執筆、福祉実習や国家試験の勉強も並行して行う、目まぐるしい日々がスタートしました。短期大学時代も実習は経験していましたが、大学病院での実習は大きく違う点がたくさんありました。各診療科での専門的な治療は、一般の開業医では見られないような困難な症例も多くあり、教科書でしか見たことがなかったような症例も見学することができ、非常に勉強になりました。臨床実習が始まった頃は、自身の知識や技術の至らなさに、落ち込むことも多くあり、苦手な処置から逃げたいと思うこともありました。しかしその度に診療中にも関わらずご指導くださるドクターや、快くご協力くださる患者さん、困ったらいつも助けてくださる衛生士さん、相談に乗ってくださる学科の先生方の存在を心強く感じ、次はここに注意しよう、次はもっと予測しながら動こう、

といったように、苦手な処置に対しても、前向きに考えられるようになりました。また、クラスメイト全員が同じ実習先で実習を行っていることも心強く、分からないことや不安なことの解決には、いつもクラスメイトの協力がありました。就職活動や勉強も頑張りながら、実習に励む友人を見て、何度「私も頑張ろう」と励まされたか分かりません。臨床実習が終了した今、実習初期に比べて、自信を持ってアシストやスケーリングなどの処置を行えるようになったと感じます。まだ知識も技術も不十分で、これからも多くのことを学んで行くこととなりますが、無事に実習を終了し、自身の成長を感じられたのは、周囲の人のお陰だと感じます。この実習期間で関わったすべての人に感謝しています。

この2年間で得た知識や技術、そして何より人との繋がりは、私の人生にとってかけがえのないものになりました。編入学という、一見遠回りのように見える道を選択しましたが、とても価値のある選択だったと思います。卒業後は、新潟大学で学んだことを生かしながら、新たな挑戦をしていきたいと思っています。



実習最終日の記念に撮影

# 大学院修了にあたり

## 大学院修了にあたり

硬組織形態学分野 真喜志 佐奈子

この度大学院を修了いたしましたので、これから進学を考えている方の参考になればいいなという思いで、進学前後の体験談や私の考えを書かせて頂きます。

私が基礎研究の道に進んだきっかけは、3年次の解剖実習でした。自分のレベルアップを大いに実感できたので、研究もこの延長にあるものかしらと思い、その世界に足を踏み入れてみたのが4年生の夏でした。

定期試験前日に真夜中のラボで、切片の染色をしていた日もありました。不安はありましたが、頭もカラダも存分に動かしていると開けたことのない扉が開いていく感覚があり、新たな自分への挑戦として楽しみながら過ごしていました。もちろん大変でしたが、今となっては良い思い出になっています。

講義に研究に部活や図書館利用など、大学ならではの“お得感”（同じ授業料で勉強し放題。常にそう考えて動いていた）をエンジョイしていたある日、Bostonで開催される学術大会に出場する事が決まりました。臨床実習が始まって私は5年生でした。頑張ればこんなご褒美が待っているのか、ありがとう大島先生（私の教授）！と心も体も踊りました。

Bostonでは、発表後に世界中から集まった研究者とお話してご飯を食べて、みんなでダンス（あまり馴染めなかった）をしました。新しい発見や学びが沢山あり、新潟に帰ってきてからも

1ヶ月くらいウキウキが収まらなかった事を覚えています。

その後、国家試験を無事にクリアして臨床研修を終えた後に、再びラボの扉をたたきました。大学院1年生の始まりです。母が歯科の開業医なので、私が大学に残ると伝えたとき（事後報告）両親は寂しがっていましたが、最終的には応援させました。

本題である大学院生活ですが、私は週1回歯科医師として臨床の機会を得ながら研究を行っていました。夏は実習のお手伝いとして解剖実習に明け暮れ、その他のシーズンは学会発表の準備や論文作成を繰り返すうちにあっという間に4年間で過ぎていき、今に至ります。院3年時にはLondonの国際学会にて口頭発表を行い、ダンスセッションも楽しめてかなりプラスの刺激をもらいました。海外の舞台に立てた事は今でも私の生きる原動力になっています。いつかまたあの場所に…と考えるとやる気が湧いて準備が楽しく感じます。

最後に…

大学生活において目標を持つ事は大切です。しかし、国家試験を通る他に明確な目標を見つけられる学生（研修医あるいは大学院生）の方は多くないと思います。なにせ選択肢が少ないので、まずはそれを増やす、兎に角挑戦してみる事が大切だと思います。“Never a failure, always a lesson”精神で、大学生活をエンジョイしながら自分の好き嫌い・得意不得意を見つけられると、目標が立てやすくなると思います。私の大学生活を支えて下さった先生・学務・総務・友人の皆様と愉快なラボメンバーに、改めまして心より感謝申し上げます。



## 大学院修了にあたり

新潟大学医歯学総合病院薬剤部 顎顔面口腔外科学分野

吉田 謙 介

はじめまして。新潟大学医歯学総合病院薬剤部に所属しております、吉田謙介と申します。現在、東3階病棟専任薬剤師として歯科医師の先生方と一緒に仕事をさせて頂きながら、社会人大学院生として顎顔面口腔外科学分野で臨床研究を学ばせて頂いております。

この度、「大学院修了にあたり」とのテーマで寄稿依頼をいただきましたので、簡単ではありますが大学院生活を振り返りたいと思います。私は東京薬科大学薬学部を卒業後、新潟大学医歯学総合病院薬剤部に入局いたしました。

私の研究テーマは「歯科領域における薬物療法への薬剤師の介入効果に関する研究」についてでした。具体的には、歯科領域における抗菌薬の適正使用に関する報告でした。歯科外来における普通抜歯および下顎埋伏智歯のSSI発生状況に着目し、薬剤師の立場から経口抗菌薬の使用状況を後ろ向きに調査しました。さらに、その調査結果を踏まえ、下顎埋伏智歯抜歯患者を対象にガイドラインの範疇で抗菌薬の投与期間とSSI発生率に着目し、患者背景を揃えた詳細な前向き研究を行わせていただきました。詳細は論文を見ていただければと思いますが、本研究において、歯科領域における薬剤師の介入は、入院病棟のみならず、歯科外来に対する普通抜歯および下顎埋伏智歯抜歯のSSI発生率を増加させず、抗菌薬使用量の減少、ガイドラインに沿った抗菌薬の選択、投与期間の短縮、投与タイミングの決定に寄与することを明らかにすることができました。

社会人大学院生の期間に論文11報（主論文6

報）、学術奨励賞3度受賞、科研費若手研究採択など、大学院へ進学する前には想像もつかなかった成果を上げることができました。このような成果を上げることができたのも、指導教官や協力していただいた口腔外科医の先生など周りの人に恵まれたおかげです。社会人大学院生としての一番の収穫は、「人間として成長することができたこと」だと思います。人脈、やり切る力、計画性など本当に沢山のことを学ばせて頂きました。

集大成を国際学会に発表する予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で機会がなくなってしまったことはとても残念でした。しかし、ある意味では叶えたい目標の一つとして残されており、いつか必ず実現したいと思います。そして、今後も学位取得に満足せず、新潟大学で博士（歯学）を取得した初めての薬剤師として、歯学・薬学の視点を持って世の中に貢献していければと思います。

最後になりましたが、本研究遂行にあたりご指導を頂きました顎顔面口腔外科学分野の高木律男名誉教授、富原圭教授、児玉泰光先生、ならびにご協力頂きました全ての先生方に心より感謝申し上げます。



同期の社会人大学院生 アンドレア先生と  
コロナ禍での学位授与

## 令和3年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名

博士の専攻分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	真喜志 佐奈子 （口腔生命科学）	Osteopontin on the dental implant surface promotes direct osteogenesis in osseointegration （デンタルインプラント表面のオステオポンチンはオッセオインテグレーションにおける直接性骨形成を促進する）
博士（歯学）	伊 藤 圭 一 （口腔生命科学）	万能試験機を用いた歯科用石こうの硬化膨張圧の検討
博士（歯学）	SALAZAR Andrea Rei Estacio （口腔生命科学）	Occlusal evaluation using Modified Huddart and Bodenham scoring system following two-stage palatoplasty with Hotz plate: A comparison among three different surgical protocol （Hotz床併用二段階口蓋形成術におけるModified Huddart and Bodenhamスコアリングシステムを使用した咬合評価：3つの異なる外科的プロトコル間の比較検討）
博士（歯学）	吉 田 謙 介 （口腔生命科学）	Research on the effects of pharmacist intervention for the drug therapy in dentistry （歯科領域における薬物療法への薬剤師の介入効果に関する研究） 第1報 Clinico-statistical Survey of Oral Antimicrobial Prophylaxis and Surgical Site Infection Regarding Ordinary Tooth Extraction and Mandibular Wisdom Tooth Extraction in the Dental Outpatient Clinic （歯科外来の普通抜歯および下顎埋伏智歯抜歯に関する予防的経口抗菌薬と手術部位感染の臨床統計調査） 第2報 Comparison between the Prophylactic Effects of Amoxicillin 24 and 48 hours pre-operatively on Surgical Site Infections in Japanese Patients with Impacted Mandibular Third Molars: A Prospective Cohort Study （下顎埋伏智歯抜歯に関する日本人の手術部位感染に対する術前24時間と48時間のアモキシシリンの予防効果の比較：前向きコホート）





# 臨床研修修了にあたり

## 臨床研修修了にあたり

Aコース臨床研修歯科医 永島和裕

この度、歯学部ニューズ原稿依頼を賜りましたAコース歯科研修医永島和裕です。僭越ながら表題について執筆させていただきます。駄文ではございますが、お付き合いいただけると幸いです。

執筆しております現在は11月ですが、此処新潟には冬の足跡が一步一步近づきつつあるのを、身をもって感じております（今大学で原稿を書いています、本音を言うと、寒いので一刻も早く帰宅して炬燵でぬくぬくしたいです）。思い返すと昨今の頃は、国家試験勉強をしていたのだと思うと、時の流れる速さには驚かされます。藤井先生が言ったとおりです。

前置きが長くなりましたが臨床研修修了にあたり私が感じたことを書き連ねていこうと思います。

4月、我々は歯科研修医として新たな門出を迎えました。期待と不安が入り混じりながらではありましたが、私の場合、期待のほうが大きかったように思います。というのも、本学の研修プログラムは診療参加・実践型を特徴としているためです。昨年1年間新潟大学での臨床実習を終えたときに私が持った思いは、もっと患者さんのために上手く、そして患者さんに負担をかけないような医療提供ができるようになりたい、というものでした。国家試験の勉強中もペンではなく、タービンを持ちたかったぐらいです。それは過言かもしれませんが、実際に臨床の現場で経験を積み、経験豊富な上級医の先生方から直接指導を受ける機会がある、これほどに恵まれた環境で学び、働けることは私にとって、この上ない喜びでした。

Aコースの研修は30人程度の患者さんの治療計

画を立て、自らの手で治療を行います。その過程で時に研修医の同期に意見をもらったり、時に上級医の先生方にご指導いただいたりすることで、自分自身の知識や考える力をブラッシュアップできたと思います。

思い返すとAコースではともに学び、支え合える同期の存在は非常に大きかったなと思います。診療で上手くいかないときは励まし合い、どうすれば上手くいったのかを一緒になって考えてくれました。これからも同じ歯科医師として共に前へ前へ進んでいきたいです。正に、振り向くな後ろには明日はないから前へ前へ状態です。

また、大学院・レジデントの先生を含め、上級医の先生方には感謝してもしきれないほどにお世話になりました。治療手順、治療選択の考え方をはじめとして沢山のことを教えていただきました。たまに愚痴をこぼしても、親身になって話を聞いてくださいました。この恩を返すとすれば、今後私たちが先生方から教えていただいたことを生かして、患者さんに最善の治療を提供することなのかなと思います。

最後になりますが、この1年間で指導いただきました藤井先生をはじめ、歯科総合診療科の先生方、同期のみんな、自分をここまで支えてくださった沢山の方に深く御礼申し上げます。



指導医の誕生日にて  
筆者は左から2番目

## 臨床研修修了にあたり

### B2コース臨床研修歯科医 小林水輝

この度歯学部ニュースを執筆させていただきます、本学51期生の小林水輝です。大学卒業後は四月から新潟市民病院にて半年間、十月からは冠ブリッジ診療科にて臨床研修を受けさせて頂いております。残すところ三分の一となった研修生活を振り返ると、改めて歯科医療の面白さ、また奥深さを実感する日々だったと強く感じます。

前半の研修先の新潟市民病院では、医科歯科連携を主軸とした周術期治療や、入院患者さんの歯科治療、また救急外来での口腔外科的治療など様々な症例を担当させて頂きました。臨床の現場は目まぐるしい程のスピード感で、学生実習の頃とは必要とされる速度もクオリティもまるで違っていました。「外来にいる時はとにかく無駄な時間をなくそう」「同じことを五分トライするのはやめよう」と決めて診療し、質の面では自分が抜歯した歯を石膏に植えて模型を作り、昼休みに冠除去や形成、根治、抜歯の練習をしたり、診療一つずつを指導医にフィードバックしてもらったりして研鑽を積みました。自分の手が想像している通りに動き、頭で考えたことと目で見ている状況と手の動きが全て一致して抜歯が出来た時の感覚は、何ものにも代えがたい達成感でした。

また患者さんにとっては私が研修医であることは関係なく、担当する以上は単なる主治医なのだという自覚も、自分の責任感を育ててくれたように思います。「最初の半年なんかどこに行ったって勉強になる」と思いながら始まった半年間でしたが、終わってみると「ここだったからこそ学べたことが沢山あった」と胸を張って言える、有意義な研修生活でした。

そんな思いを抱えながら大学病院に戻り、冠ブリッジ科での研修が始まりました。冠ブリッジ科では指導医は一人ではなく、症例ごとに異なる先生方が担当し相談に乗ってくださいます。技工物についてなどの初歩的なことから症例検討の資料作成までしっかりと見て頂けるので、日々心強さを感じながら診療に励んでいます。

口腔外科症例がメインで、一般診療も入院患者さんの一時的な治療が主体だった半年間とは異なり、初診から長期間の治療計画を立案する大学での診療はまた違う面白さがあります。経過観察とするか治療を開始するか、どういった補綴物を入れるか、この患者さんの治療ゴールはどこなのか……選択肢があればあるほど悩み、その中からベストを選び取って行くのはとても難しく勉強になります。

まだまだ始まったばかりの歯科医師人生ですが、いつか振り返った時に「初心に帰らねば」と思えるような初心を作っている最中です。尊敬する先生方にご指導頂きながら、残りの研修期間も有意義に過ごしたいと思います。

最後まで読んで頂きありがとうございました。



前期協力型施設の新潟市民病院にて  
撮影時のみマスクを外しました

# 教授に就任して

顎顔面口腔外科学分野 富原 圭



本年7月1日付けで富山大学歯科口腔外科学講座より本学に赴任して参りました富原 圭でございます。皆さまどうぞよろしくお願い致します。

私は本学の31期生で、2001年3月に卒業しました。卒業後の進路として口腔外科医の道を選び、まず漠然と「口腔癌を学びたい」という一心で、札幌医科大学口腔外科の門をくぐりました。教授の小浜源郁先生は、口腔扁平上皮癌の浸潤様式「山本-小浜分類（YK分類）」を提唱したことで有名で、当時の教室は、単科で50床という大きな規模、しかも医局員の数も驚くほど大勢でした。私の同期研修医は総勢13名で、そのうちの一人が口腔病理学分野の山崎学先生でした。私の自家用車に荷物を積んで、山崎先生と一路、新潟港からフェリーで北海道へと向かったのですが、二人とも食事が喉を通らないくらい不安と緊張で研修初日を迎えたことを今でも覚えております。研修医生活は、朝晩の点滴をはじめ、病棟業務に四苦八苦し、先輩や看護師さんに叱られながら、夜は反省会と称し連日のように先輩に連れられ居酒屋で飲んで食べて、さらにススキノで遊んでの日々でしたが、今となっては良い思い出です。1年間の研修を終えた山崎先生は、その後再び小樽港から新潟へと戻ったのですが、離れ行くフェリーにいつまでも手を振り、同期の皆で号泣したことを思い出します。

臨床研修を終えた私は、その後大学院へと進み、小浜先生に懇願し、分子医学研究部門の濱田洋文先生、加藤和則先生の指導を仰ぐこととなり、腫瘍免疫学を学びました。当時を振り返ると、内科や外科の先生方というのは臨床のキャリ

アを積んでから大学院生となる人がほとんどで、臨床医として第一線で活躍しながら、リサーチも真剣に取り組んでいる諸先輩の姿に、若造の私は強く感化され、憧れをいただきました。

学位取得後は再び口腔外科医としての研鑽を積むこととなり、現富山大学教授の野口 誠先生、現札幌医科大学教授の宮崎晃亘先生、現那覇市立病院歯科口腔外科部長の仲盛健治先生らのご指導のもと、鉤の引き方からメスの握り方まで、臨床医として基本を学びなおし、さらに大学人としての心構えなどを先輩達の背中を見て学びました。まさに臨床一直線で邁進していたころでしたが、新たなことに挑戦したいという気持ちに駆られ、2008年より米国テキサス大学衛生科学センターサンアントニオ校のポスドクとして、再び腫瘍免疫学の研究に従事することとなりました。ポスドクとしての私のお給料は年収にして\$30,000程度とわずかでしたが、貧しいながら家族で本当に大切な時間を過ごすことができました。しかし、テキサスに少し長居してしまった私は、その後、札幌医大に戻るタイミングをすっかり逃してしまい、かつての上司の野口先生を頼って、2011年より富山大学に入局し、以後11年間を富山でお世話になりました。

私はこれまでに新しい環境にチャレンジする前は、必ず一分一秒と迷いに迷ってききましたが、かつて、恩師の一人から、「行った先で頑張れば、そこが一番良いと思えるはず」と助言をいただきました。私自身がこれまでの道のりで、そのように思えたかどうかは別として、新しい環境に身を投じることの醍醐味は、人との出会い、新たな人脈形成です。今回、新潟大学に赴任するにあたって、皆様と出会えること、そして共に学ばせていただくことを楽しみにやって来ましたので、これからどうぞよろしくお願いいたします。



## 第3期中期目標期間4年目終了時評価 (国立大学法人評価) について

国立大学法人は国立大学法人法に基づき、中期目標期間の業務の実績について、文部科学省の国立大学法人評価委員会の評価を受けることとなっています。この度、国立大学法人の第3期中期目標期間（平成28年度から令和3年度）における業務の実績について、令和元年度末の4年目終了時

に教育研究の状況について評価を受けました。歯学部は教育活動の状況で「特筆すべき高い質にある」の評価を受け、この最も高い評価は全国国立大学歯学部では本学歯学部が唯一でした。(https://www.niad.ac.jp/sub\_hyouka/kokudai2020/3\_2020\_34\_niigata\_2.pdf)

## 令和3年度Student dentist認定書授与式 および臨床実習登院式の実施について

令和3年10月12日(火)に、Student Dentist 認定証授与式及び臨床実習登院式を行いました。Student Dentist認定制度は、共用試験(CBT・OSCE)の結果を基に、全国歯科大学学長・歯学部長会議およびスチューデント・デンティスト認定運営協議会が診療参加型臨床実習に必要な知識、技能、態度を有した学生をStudent Dentistとして認定するものです。

今年度は歯学科5年次の学生45名がStudent Dentistに認定されました。また授与式に引き続いて臨床実習登院式が行われました。



## 第3期中期目標期間の科学研究費助成事業の採択結果について

令和4年3月31日で第3期中期目標期間が終わります。本部研究推進部URAから歯学部の科学研究に関するデータをいただきましたので、紹介します。データは過去5年間のもので（2017年度分は集計方式が異なるので、データなし）、新規採択率の2017年度から2021年度の経年変化は図1に示すように、2019年度に最高値50.43%となり、2021年度は45.6%でした。新規採択件数は平均54.6件（2021年度57件）で、継続分も含めると平均141.8件（2021年度新規57件、継続88件）でした。

表1に中区分別採択件数上位10機関（[https://www.mext.go.jp/content/20210107\\_mxt\\_gakjokik\\_000019825.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210107_mxt_gakjokik_000019825.pdf)）（区分：口腔科学およびその関連分野）を示します。新区分になってからの口腔科学およびその関連分野での新規採択件数は174件（全国5位）ですが、新規採択率は

45.2%（昨年度44.7%）で、全国2位でした。また配分総額は2億4300万円（全国5位）で、1課題あたりの採択金額は190万円（昨年度186万9200円）で全国4位でした。基盤的経費の増加が見込めない中、科学研究費の重要性は高まる一方ですが、教員数の削減に伴い、歯学部（病院所属を含む）採択金額（新規+継続）は2017年度の2億2930万円から、2021年度では1億4370万円に低下し、1人あたりの採択金額（新規+継続）も約241万から2021年度では約167万に低下しています。1件あたりの採択金額の増加、すなわち大型の科学研究費の申請・採択が必要となっています。そのためには、学際的観点から先端的手法を用いた質の高い研究論文の輩出が必要と考えられます。

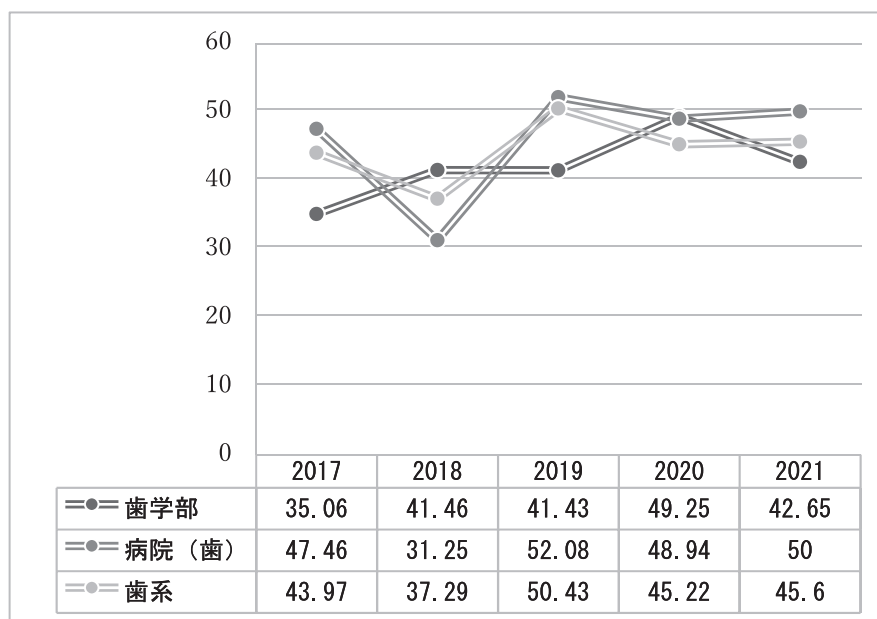


図1 新規採択率の経年変化（2017～2021年度）

表1 中区分別採択件数上位10機関（口腔科学及びその関連分野）

順位	機関名	新規採択件数	配分額 (直接千円)	応募件数 累計数	採択率 (%)	1課題あたり 採択金額
1	大阪	240	539,800	509	47.2	2,249.2
2	医科歯科	238	404,900	896	26.6	1,701.2
3	東北	202	374,200	471	42.9	1,852.4
4	岡山	183	334,600	439	41.7	1,828.4
5	新潟	174	330,600	385	45.2 ②	1,900.0 ④
6	広島	170	269,000	413	41.2	1,582.4
7	九州	168	339,600	398	42.2	2,021.4
8	日本	134	162,700	632	21.2	1,214.2
8	長崎	131	255,000	327	40.1	1,946.6
10	昭和	130	197,200	503	25.8	1,516.9

## 第4期を見据えた 前倒し事業の採択について

第4期中期目標期間を円滑に始動させるために、本学では第4期を見据えた前倒し事業を公募していましたが、この度、歯学部が提案していた「アライアンスラボ整備による若手研究者育成事業」が採択されました。

歯学部ではElsevier社のデータベースScopusを用いて研究実績の見える化を図り、トップ10%および25%ジャーナル論文比率はそれぞれ21.9%、56.5%であるものの、トップ10%、25%論文比率は7.8%、27.1%であり、このことは発表論文の質をさらに向上させる必要があります。ま

た歯学部はこれまでの概算要求事業としてアライアンスラボを整備し、若手研究者の育成を行っています。そこで本事業では最新鋭の高度な研究機器をアライアンスラボ等に設置し、共有化を図るとともに、教育研究分野の壁を越え、若手が自由闊達に研究できる環境を整備し、質の高い論文を輩出し、トップ10ジャーナル論文数の増加を目指すものです。本事業では、令和3年度中に、シングルセル解析装置、動物用蛍光ライブイメージング装置などの機器が整備される予定となっています。



## 歯学部 1 年生の様子

歯学科 1 年 中 澤 夏 希

「コロナ禍がなかったらどんな大学生活を送っていたらう。」

毎日のオンライン授業や部活の大会中止の知らせを受ける度にこう思います。私は、9月の下旬に「歯学部学生の様子」という題で寄稿の依頼をいただきました。何を書こうかと1年間を振り返るたびに浮かぶのは、新型コロナウイルスの影響を強く受けた、制限の多い生活ばかり。新潟大学に入学して約1年がたちますが、3年生以上の先輩方が思い出として話すキャンパスライフとは程遠い毎日です。しかし、私たちは自分の置かれた状況をしっかり受け入れ、一生懸命、そして明るく学生生活を送っています。

前期は五十嵐キャンパスでの対面授業は1つありませんでした。初めてのオンライン授業ではパソコン操作がうまくいかず、友人に助けってもらったことは今では良い思い出です。毎週金曜日には旭町キャンパスへ早期臨床実習Ⅰと歯学スタディスキルの講義を受けに行っていました。グループで専門診療科の必要性について考察したり、レポートを書いたり歯科の専門的な内容にも触れる機会がありました。グループワークでは、画面越しに議論することの困難さも感じましたが、学ぶことや得るものが多く、良い経験をさせていただいたと実感しています。後期は週2日、英語の対面授業で五十嵐キャンパスに通っています。授業後に次のオンライン講義が始まる、と急いで帰る友人の姿は恒例になっています。

私は剣道部に所属していますが、部活動にも新

型コロナウイルスが影響を与えています。面をかぶる際にはマスクとマウスシールドを着用します。そのため、息苦しさは普段の倍以上。夏場の稽古はこまめに水分補給をして、熱中症にはとくに注意していました。また、互いの顔が近くなってしまふ、つばぜり合いを積極的にしないよう留意しています。このように戸惑うことや慣れるのに時間がかかることはありますが、新ルールや新しい常識に対応しながら、普段の稽古に励んでいます。

1年生の今は、講義のほとんどは教養科目、部活動でもまだ責任を負う立場ではありません。2年生からは、特に学習面では大変なことやつらいことが待ち受けているでしょう。今とは比較にならないほどの量や難易度の学習内容にくじけそうになることもあると思います。そんな時、同期の仲間や先輩の大切さを実感しながら一つ一つ乗り越えていきたいです。私たちの生活は約2年前から一変してしまいましたが、仲間との談笑や剣道の楽しさ、テストの大変さなど、変わらないものも多いな、と振り返ってみて感じます。いつか、新型コロナウイルスなしで語ることのできる1年が訪れるのを楽しみにしていますし、切実に願っています。それまで自分にできることに全力で取り組み、未来の医療者としての自覚ある行動を心がけていきたいと思っています。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

# 歯学部 2 年生の様子

歯学科 2 年 山 崎 葵 偉

ふう〜っと、歯学科の大きな山場の1つでもあるとされる2年前期の定期試験も全て終え、ほっと安堵しています。そのためこの執筆では心の声が漏れてしまうこともあるかもしれません。気が付けば歯学部に入學してから早くも1年半が経ちました（心の声：入学式は行われていないけれども）。スマートフォンにある写真を見返すと、1年前の初々しい私と友だちたちの様子が残っており、卒業まであと4年ほどあるにも関わらず懐かしく感じています。試験期間中は毎日のように工事中の図書館に足を運び、私にとって図書館はドラゴンボールでいう「精神と時の部屋」状態でした。私が悟空だとすると、ベジータのような存在が何人もいて、切磋琢磨できる関係の友だちがいたからこそ、ここまで来ることができていると常々感じる毎日です。また、私は歯学部バドミントン部に所属していますが、先輩方が試験のことについて教えてくださったり、アドバイスをしてくださったりとあらゆる科目で助けられました（心の声：持つべきものは先輩だ!）。そしてコロナ禍における大学生活ですが、もう慣れました。新型コロナウイルスにもう文句はありません。

ところで、後期の授業では前期の授業と違い、ただ覚えるといった内容ではなく、実習を行ってレポートを作ったり、あるいは発表したりといった授業が多いです。しかし、どの授業においても立派な歯科医師になるという目的には繋がっていると感じます。生体工学で初めてアルジネート印象材を扱ったときは全く上手く出来ず、歯科医師としての先行きが不安になりましたが、修業あるのみだと思っています。また、後期はインシュタインも驚くほど、とにかく時間の流れが早いものです。ぼーっと毎日を過ごしていると、すぐに来年を迎えてしまいそうです。そのため今私は、自分が良い歯科医師になるためにはどうした

らいいのか、ということを考える良い機会だと思っています。また、2年になって専門科目を学び始め、歯科に関することももちろん学びますが、基礎的な科目が主です。しかし、この基礎的なことが後々CBTや国家試験においてとても重要になるため、決して侮れません。蓄えるべき知識は膨大で、今の時点できついと感じる時もありますが、筋トレのように負荷がかかっているからこそ、成長していけるのだと強く思います。

最後に、コロナ禍という環境下であることは変わっていませんが、このような環境下の中でも学ぶことができ、また毎日を楽しみ過ごしていることは、私を支えてくれるたくさんの人がいるからこそである、ということをお忘れはいけません。よってこの歯学部ニュースを誓約書として、感謝をお忘れなく誓います。そしていつの日か、私がこの歯学部ニュースを見返した時に、自信を持って歯科治療を提供できる歯科医師とされているように、日々を精進していきたいと思えます。



講堂にて 友人と

# 歯学部 3 年生の様子

歯学科 3 年 赤 峰 沙 夜

3 年生も残り 4 か月、これが掲載される頃には 4 年生の準備をしていることだと思う。

私は浪人して入学したため、同級生が就職や大学院への進学など新しいステージに向けて準備している様子をよく耳にするようになり、刺激をもらっている。

基礎系の科目が中心だった 2 年生から一転、3 年生からは専門科目も多くなり実習も増えた。前期は週二回の人体解剖学実習で実際にご献体を解剖させていただき、早期臨床実習Ⅱでは外来見学や臨床の場で働く先生方のお話を聞くという機会をいただいた。9 月のテスト期間が終わり、後期からは歯冠修復学実習（クラブリ実習）、歯形彫刻実習（カービング実習）、病理学総論実習などを行っている。また、11 月後半からは保存修復学実習が始まった。今まで見たことはあっても触ったことがなかった器具を使用して模型の歯を削ったり、様々な材料を用いて歯の型を取ったりと、一気に歯学部らしくなった。先輩方には及ばないとはいえ、時間が足りず、目の前にある課題を終わらせることに必死な毎日を送っている。小学生のころから宿題や課題は溜めずに早めにやってきた方だが、次から次へと出される課題は溜まる一方で、何かを忘れていないのではないかと不安になって友人と確かめ合うのが当たり前になった。ただ、キーボードの予測変換が歯科関連に置き換わってきているので 1, 2 年生の頃よりはレポートが多少書きやすい。

後期の実習の中でも特に、限られた時間の中でタスクをこなさなければならないクラブリ実習は想像以上に大変で、実習が終わった 18 時の自分は朝よりも一回り縮んでいると思う。今ちょうど折り返し地点まで来たが、相変わらず火曜日の朝は気合を入れないと布団から出られない。特に雨・

雪と強風で傘がなんの役にも立たない日は、地元の寒くても透き通った快晴が恋しくて帰りたくなる。これをこなしてきた先輩方は本当にすごいなとつくづく思う。クラブリ実習やカービング実習では、5 年生の先輩方にたくさん助けていただいている。私も 2 年後に先輩方のように自信をもって相手に説明できるように、また臨床実習で適切に動けるように、今実習で行っている一つ一つの操作の意味を理解し、失敗したらなぜ失敗したのか原因をよく考えながら取り組みたい。

授業以外の部活について、コロナ禍で大会は中止になってしまったが練習は行うことができている。私は 10 月からバスケット部の部長を務めさせていただいており人数や時間を見ながらメニューを考える難しさを感じているが、先輩や副部長、同期をはじめとした部員にたくさん助けてもらっている。部長の期間が終わるまで役割を楽しく全うしたい。

最後に、学年が上がるにつれてもっと忙しくなるだろうが、自分にとって何が重要なのかを見誤らないようにしたい。また、全力でサポートしてくれる家族や周りの人々への感謝を忘れずに今後も学生生活を無駄のないように過ごしたいと思う。



バスケット部の同期と



## 4年生の実習風景

歯学科4年 柳 舘 快 利

歯学部学生の様子というテーマで寄稿の機会を頂きありがとうございました。また、この機会に歯学部ニュースを改めて読むことができ、文章の多くがコロナ禍の話題で始まることに気が付きました。確かに、様々なメディアを見ても、何処かへ移動するにしても感染拡大について考えないことなどありません。編入時を思い返すと、リモート授業が主体になるとは想像も出来ませんでしたし、日常的にマスクを付け、フェイスシールドを装着して実習をすることも考えていませんでした。そこから、慣れないなと思いながら1年・2年と経過し、ついには新しい生活様式も習慣化しつつあります。そして最近、感染者数の激減に伴い一部を除いて対面授業になりました。

さて、対面授業に戻りつつありますが4年生は実習等が多いため元々ほぼ対面形式であり、特に後期に入ってから実習漬けの毎日を送っています。具体的には週4日で実習が組み込まれ、その他にもグループ学習などを行っております。今回は学生の様子ということで、1週間を簡単に振り返ってみました。

まず、月曜日には欠損補綴学の実習にてブリッジの支台歯形成とTEKを作製します。その際、脳内ではこの支台歯の平行性は大丈夫か、遠心舌側部の形成また足りなかったなど自問自答を繰り返し、なんとか先生のチェックを頂き、一旦喜びます。その後TEKのマージンが壊れたり、修正後に咬合面が高くなったりして落胆します。そして、咬合調整や形態修正に全集中し気付けば実習が残り30分、ラストスパートで何とか終わることが出来るか出来ないかでまた一喜一憂します。

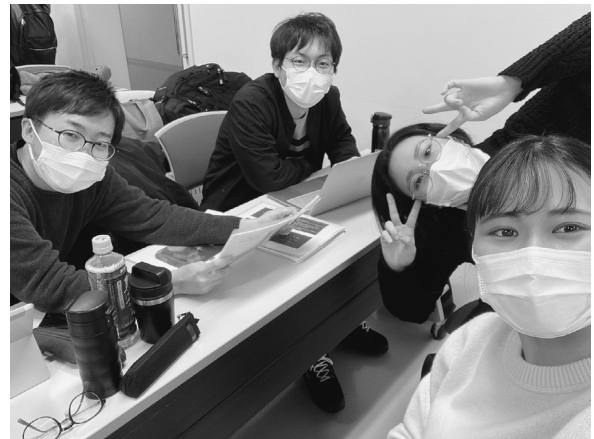
水曜日には歯周病実習でwalking probingやSRPを経験しています。脳内では25g圧はこんな軽いのか、SRPで模型歯肉スタボロになって

しまった、スケーラーに余計な力が入り指が疲れてうまく動かせないなど考えつつ、感覚を掴みながら学んでおります。

その他にも、木曜日には歯内療法学実習にて歯髓腔の狭さを思い知り、金曜日には矯正実習にて思い通りにワイヤーを曲げられないもどかしさや歯の移動の難しさを感じました。

以上実習について、少し可笑しく書きましたが、実習中は真剣そのものでクラス全員が全力で取り組んでいます。実習は楽しくもありますが、頭で思い描いていることを実現するのは難しく、歯痒いと感じることが多いです。また、座学で理解したと思っていても実際に行ってみると治療の流れが身についていなかったことがよくわかります。実習を通して、上手いかない感覚に負けず技術を身につけ、座学も補完できるように努力を続けております。

最後に、この学年は人数が少なく何かと話題になることが多いとよく聞きます。人数が少ない分、先生方との距離が近いと考え、このメリットを存分に活かしながら人間味溢れるクラスの中で切磋琢磨していきたいと思っております。



編入生の人たち

# 臨床実習で感じたこと

歯学科5年 高橋 侑里

時が過ぎるのは早いもので、私たち53期生は5年生となりました。歯が何本あるかすら正確に把握していなかった歯学部入学時の私は、緑衣を来て病院内を歩いている今の姿など全く想像もできませんでした。

1～4年生もあっという間に過ぎましたが、5年生は格別時間の流れが早く感じました。ポリクリや実習と並行してCBTを乗り越え、開放感に満ち溢れた夏休みを過ごしたのも束の間、OSCE受験、当院式、を経て臨床実習が始まりました。

10月の引き継ぎ期間は、ただただ先輩の背中が頼もしく大きく見え、眩しく感じました。自分たちが来年の今頃、こんなに大きく成長できているのか、と疑問に思うほどでした。引き継ぎ終了時は、先輩がいなくなり今後自分1人で治療を行わなければいけない不安で押しつぶされそうで、6年生にずっといて欲しい、としか思えませんでした。

6年生がいなくなった11月は全てが発見の連続で、毎日新しい技術や知識を目の当たりにしました。模型でやっていたこと、教科書で習ったこととは違うことが求められる場面も多々ありました。今まで実習を行っていたとはいえ、実習では模型で行うか気心知れた同期と相互で治療を行うかであったため、実際の患者さん口の中を生で見るのはほぼ初めてでした。自分ではできると思っていたことも、実際患者さんを目の前にすると、どうすればいいかわからなくなり、結局なにでもできず、自分の不甲斐なさ、歯痒さを痛感しました。しかし、このような右も左も分からない状態でも、臨床現場では1人の医療従事者として扱われます。患者さんの治療を行う際、わからない、できないということは許されません。臨床実習が始まって1ヶ月が経ちましたが、今だに求められることに対して十分に処置が行えず、患者さんをお待たせしてしまったり先生に迷惑をかけたりして

しまうことがほとんどです。しかし、そんな時も患者さんは嫌な顔一つせず優しく協力してくださり、先生は熱心に指導して下さいます。なんでこんなに患者さんや先生は優しいんだろう、と常に思い、感謝でいっぱいになります。そんな患者さんや先生のことを思うと、この患者さんのためになら頑張りたい、先生の素晴らしい指導を吸収したい、と思います。与えられた環境やチャンスを最大限活かし、この一年で沢山の経験を積むことで成長していきたいです。

また、学年が上がるごとに、同期のありがたみを痛感します。低学年の頃から、先生たちが「学年の仲がいいほうが臨床実習を乗り越えるのいい」と仰っていたのも最近は特に頷けます。何気ない技工室での会話で癒されたり、自分の症例の参考になったりして、最近は技工室で同期と過ごす時間にとっても救われています。これから先、1人では絶対に上手くいかないことも、仲間のアドバイスやサポートはもちろんのこと、励まし合うことで乗り越えることができると思います。学生生活もあと残り1年半、長いようであっという間に過ぎるとは思いますが、53期のみんなで力を合わせ、臨床実習を乗り越えていきたいです。そして、来年臨床実習を振り返った時、一年間精一杯取り組めたと自信を持って言えるように行動していきたいです。



当院式で 同期との一枚  
写真撮影時のみマスクを外しました

# 歯学部 1 年生の様子

口腔生命福祉学科 1 年 川 上 紗 樹

早いもので、私たちが入学してから、8か月が経とうとしています。新型コロナウイルスの感染拡大が1年たっても続いていて、入学してからはオンライン授業を中心とした授業を受けています。そのため、なかなか同じ学部生はもちろん、他学部生との交流もできない環境で、私は、友達ができるのかとても不安に思っていました。大学生になって初めてのことばかりで、履修の仕方や課題の提出の仕方など分からないこともたくさんありました。

おおよその授業が家で受けることになったので、対面での授業の方が貴重な時間となりました。前期には早期臨床実習とスタディスキルズの授業があり、これらを対面で行い、私たちが旭町キャンパスに通う機会を先生方が作ってくださいました。そのおかげで、同じ学部の人たちと話す機会が増えました。休憩時間や学校の行き帰りの時間などで会話が増え、自然と名前や顔を覚えて、ようやく交流できました。早期臨床実習は、実際に病院に行ってみたり、話を聞いたりすることはできませんでしたが、しかし、スライドを用いて、病院内の様子を分かりやすくまとめて伝えていただいたので、自分の中でおおよその想像をしながら授業を受けることができました。さらに、非対面ではありましたが、グループワークもあ

り、自分が調べてきたことやほかの人の意見を共有すると、一人では思いつかなかったことがあってグループワークの楽しさを感じました。

また、なかなか友達ができにくい環境ということとを考慮して口腔生命福祉学科の新入生交流会を先生方から企画していただきました。そこに参加して、同じ学科の友達のことを知るきっかけになりました。グループになることによって今まで話したことがなかった人と話せました。自己紹介をしてお互いの出身地の魅力や趣味、好きな芸能人の話で盛り上がり、とても楽しい時間となりました。また、新入生交流会を通して学科の先生とも交流できて貴重な機会でした。

コロナ禍での、学校生活はできないことに目が行きがちですが、今の状況だからこそできることや今しか感じられない気持ちを大切に、大学で学んでいきたいとこの1年で強く思いました。1年生は、一般教養を学んでいますが、2年生になったら歯科の専門的な授業が増えると思うので、意欲的に学びを深めていきたいなと思います。また、今後は実習もできるようになると思うので、歯学部の口腔生命福祉学科の学生として入学して、同じ学部生としての出会いを大切に、これからの大学生活を送りたいと思います。



## 歯学部 2 年生の様子

口腔生命福祉学科 2 年 須藤 悠大

初めまして、口腔生命福祉学科 2 年の須藤悠大です。「歯学部学生の様子」というタイトルのものと、口腔生命福祉学科での生活を中心に日々の学生生活について書かせていただきます。

昨年度は新型コロナウイルスの影響により授業の形態が非対面であり、五十嵐キャンパスで授業を受けることができませんでした。五十嵐キャンパスに通う、他学部の友人に出会うことを夢見ていましたが、夢叶わず充実した大学生活が送れたとは言えませんでした。オンラインであったためかあっという間に大学一年生は終了していました。慣れない環境で戸惑いながら生活していた記憶があります。

今年度は旭町キャンパスに移り、初めて対面授業が行われました。女子 19 人男子 1 人ということで不安いっぱいでしたが持ち前の美貌とかわいらしさでクラスを牛耳ることができました。講義は昨年度の教養科目より専門性が高まり、勉強のしがいがあるものでした。

講義の他に PBL という学習形態の授業が始まりました。PBL とは与えられたシナリオの中から問題点を見つけ出し、その問題を手がかりに学習を進めていく方法です。様々な症例の問題について情報を収集し、グループで討論することで、疑問・問題を解決します。この学習を通して問題発見から解決のプロセスや正しいリソースからの情報収集の手段、意義のあるグループ討議の方法を学ぶことができました。加えて、他のグループメンバーの学習態度や方法を知ることができ、自身の学習態度を見直すきっかけとなりました。

後期には実習も始まり、本格的に歯科衛生士の業務を意識するようになりました。相互実習では、講義や PBL で学習したことを対人で実践することができます。術者だけでなく、患者や補助者の役割を担うこともあるため、様々な観点から学習することができ、大変身になります。スケーリング実習では顎模型を使用して歯石除去の実習を行っています。模型ではありますが、人間の口であるということ意識して行うことが求められます。

最後に部活動について書きます。私は歯学部バレーボール部に所属しています。部活は少人数ですが、アットホームな雰囲気でもとても楽しく、居心地が良いです。先輩には部活動のことだけでなく、学校生活や私生活でもお世話になっており、大変恵まれた環境であると感じます。

このように昨年度とは異なる学生生活を送ることができ、充実しています。



6 年生部活動引退前最後の練習  
写真撮影時のみマスクを外しました

# 歯学部 3 年生の様子

口腔生命福祉学科 3 年 佐 伯 唯 衣

歯学部学生の様子というテーマということで、僭越ながら私の学生生活について話させていただきます。3年に進級してからは歯科に加え、福祉の授業やPBLも加わり、口腔生命福祉学科らしくなってきたなと感じながら、毎日慌ただしく生活を送っています。昨年度はZoomでのオンライン授業がほとんどでしたが病院での臨床実習も無事スタートし、学内の対面授業に切り替わりました。大部分を家で過ごす生活から、大学へ通い友達と他愛のない話をして過ごせる時間がとても楽しく、新鮮に感じています。

さて、後期からは病院実習が始まり、また新しい生活がスタートしました。10月から始まった病院実習では、これまで相互実習などで学んできた内容を患者さんに実践していきます。基本的に3年生の間は4年生に付き添って、見学することが多いのですが、実際に治療の補助や準備を頼まれる機会もあります。これまで習得してきたことを活かす貴重な場です。実習が始まって2か月が過ぎましたが、実習のなかで自分の知識不足や技術不足を痛感する場面も多く、自分自身の課題がたくさんみえてきました。授業や実習で学んだ知識でも臨床の場に出ると忘れていたり身についていないことに気づかされます。機敏に対応する4年生の姿をみていると、わたしは今の4年生のように一人前になれるのだろうかと不安になることもあります。

けれど、そんなときに支えになっているのは、同級生の存在です。一緒に悩みを相談し、励まし合うことでまた次も頑張ろうと前向きな気持ちに

繋がっています。また、病院でも4年生や歯科衛生士さんが頻りに声をかけてくださり、分からないことができて優しく教えてくださるのでとても心強いです。その度に恵まれた環境にいてことを実感させられます。初めは大きくあった不安も、回数を重ねるごとに自信につながっていくのを感じています。また、患者さんによって、症状は様々でこれまで座学では学べなかった症例を目の当たりにすることもあり、毎日発見や学びがあつてとても勉強になります。

また、新型コロナウイルスも以前より緩和してきたことにより、2年時にはいくことのできなかつた学外での実習もできるようになってきました。高校の歯科健診、最近では保健センターの1歳誕生歯科健診にも参加させていただき、現役の歯科衛生士さんの歯科保健指導を実際に見学させていただく、とても貴重な時間を過ごさせていただきました。

こうした実習を通して、さまざまなお話を聞かせていただく中で、自分の進路について方向性が定まってきた気がします。来年にはよいよ最終学年となり、友達との会話の中でもそれぞれの進路について話し合う機会が増えてきました。こうした話をしていると、同じ学部でもみんな違った志の中で実習に取り組んでいることに気づかされます。4年になれば、病院での臨床実習に加え、福祉実習、国家試験勉強などさらに忙しくなっていくと思います。残り1年と少しの学生生活ですが、学べることをたくさん吸収して、後悔のないように残りの大学生活を充実したものにしていきたいです。

## 歯学部バドミントン部

歯学科4年 山内 瑞起

こんにちは。歯学部バドミントン部です。現在、私たちは44人で活動しております。昨年はコロナ禍の影響を受け、部活動が全面停止となり、デンタルを含む全ての大会、浜コンなどの全てのイベントが中止となってしまいました。昨年の秋から練習は再開となったものの、今年度のデンタルも中止となり、イベントも未だに行うことのできない状況となっています。私は、部活動の一番の目的は楽しむことにあると思っています。しかしながら、現在は大会やイベントがなく、練習を行う理由さえ見失ってしまうような状態であり、部活動が最大限に楽しいと感じられない部分もあるのではないかと思います。これは新型コロナウイルスの流行に起因するため仕方がないことであり、また、ありがたみを忘れずに言える言葉ではないとは思いますが、新型コロナウイルス流行前の部活動と比べるとこれが現状であると感じます。

ここまでネガティブな内容を書かせていただきましたが、全く希望がないというような状態ではありません。むしろ、最近は新型コロナウイルス感染者が激減し、大会やイベントの開催が期待されるようになっていきます。そこで、以下にはバドミントン部の大イベントを2つ記していこうと思います。一つ目は、東北リーグです。東北リーグでは、東北大学、日本歯科大学、奥羽大学、岩手医科大学、新潟大学の計5大学が集います。1日目は、5大学で一位を争う団体戦を行い、夜は全員で飲み会です。2日目は、仲良くなった他大学の方とペアを組んだり、対戦相手として試合を行います。このように東北リーグでは、他大学との交流ができるのが最も特徴的な点です。試合はもちろんのこと、他大学の仲間との会話は貴重な経

験であり、大変楽しいものです。二つ目は、オールデンタル（デンタル）です。オールデンタルでは、全国の歯科大学バドミントン部が集まり、個人戦・団体戦を行い、約5日間にわたる長期の遠征となります。1年間の練習の成果を発揮する場であり、最上級生にとっては引退前最後の試合となります。試合数が多く、ダブルスの試合、仲間の応援、飲み会など部で一丸となって取り組むため、同級生に限らず、先輩や後輩との絆を感じられる場であり、笑いあり涙ありの最高の思い出作りの場であると思います。

これらをはじめとしてバドミントン部では楽しいイベントがたくさんあります。今のように、練習だけでも行えていることは確かにありがたいことであり、運動したり友達と会話したりと十分に楽しい活動ができているとは思いますが、やはり、練習して、試合して、飲み会していた頃が恋しく感じます。新型コロナウイルスが収まり、以前のような活気のある活動が行えるときが来ることを願います。

最後になりますが、歯学部バドミントン部を支援して下さる全ての方々に感謝申し上げますとともに、今後とも応援していただければ幸いです。



部内戦の様子  
撮影時のみマスクを外させていただいております



# 剣道部

歯学科3年 高井 勇典

こんにちは。歯学部剣道部主将の高井勇典です。この度は部活動紹介の機会をいただきありがとうございます。

## ○剣道部紹介

剣道部は歯学部だけでなく医学部と合同で行っており、医学部歯学部剣道部として普段活動しています。現在部員は19人で、現在3年生を中心に日々稽古に励んでおります。男女比はほぼ半々で部員同士の仲がいいことが特徴です。活動場所は大学内の体育館で、練習時間は17時から19時までで月・水・金曜日の週3回活動日があります。2時間という練習時間内で、先輩、後輩関係なく学生同士がお互いにアドバイスをし合うなど切磋琢磨して技術の向上に努めています。例年は金沢大学、千葉大学との交流戦の3大戦、東北地方の医療系大学が集まる北医体、夏休みには1番大きな大会である全国の歯科大学が集まるオールデンタルなど様々な大会があります。

## ○剣道部行事

剣道部では部活動以外にも様々な行事があります。例年では春にはお花見、夏には浜コン、全国各地に行くオールデンタル、冬には追いコンなどがあり、また大会の後には飲み会を開催したりと一年を通してイベントが盛り沢山です。このよう

なイベントを通して部員同士の仲がいいことが剣道部の魅力の1つです。しかし現在はコロナ禍でイベントや大会は開催されていないので、その代わり日々の稽古に勤しんでいます。

## ○今年度の部活動について

前述いたしました、昨年に続き新型コロナウイルスの流行に伴い大会等が一切無く非常に寂しい一年になってしまいました。今年剣道部に入部してくれた新入生にはそんな寂しい期間になってしまったことを申し訳なく思っています。そういった暗い側面もありましたが、しょうがない部分でもあったので自分たちにできることをしようと、改善できる部分を積極的に変えていった年にもなりました。その1つが練習メニューの大幅な変化です。剣道部には経験者はもちろん、初心者の方も所属しています。大会がない年だったので、せっかくなら基礎固めの年にしようと練習メニューの改善と初心者への手厚いフォローをし、部員全体の技術アップに努めてきました。

最後に、私自身は剣道を6歳の時から始めて、ずっと続けていますがとても良いスポーツだと感じています。そんな剣道を仲間と一緒にできることに感謝しながら部員全員で楽しんでいきたい思います。



令和元年北日本医科歯科剣道大会



普段の稽古の様子

## Beyondコロナ

歯科総合診療科 尾崎紀子

新型コロナウイルスの感染が中国で確認されてから2年以上経過しました。2年前までは普通に友人と会ったり実家にもよく帰省していましたが、今はそのことの有難さ、友人や家族の大切さを感じています。

新型コロナウイルスが日本でも流行した当初、私は新潟大学の学生で新潟大学医歯学総合病院で臨床実習をしていました。病院では、入り口での体温測定や手指消毒、診療前の新型コロナウイルス感染対策に関する問診の実施などの変化がありました。ただ、感染防御（マスク、ゴーグル等）については流行前と後であまり変化がなかったと思い、常日頃から標準予防策が徹底していたことを実感しました。これは、様々な疾患を持つ患者様が多い大学病院だからこそであり、学生のうちから感染防御を自然と身に付けられる環境で学べることを有難く思いました。

現在、私は新潟大学医歯学総合病院の歯科総合

診療科で研修を行っています。こちらで研修をさせていただくことが決まった時は新潟大学の学生であった頃に経験した臨床実習の延長なのかなと思っていました。しかし実際は違いました。診療時間が短くなり、時間を意識して診療するようになりました。また、学生の頃は先生に手助けしていただいた際に心のどこかで、「最初だし完璧にできないのは仕方がない」と思っていました。しかし研修医になってから先生に手助けしていただいた際には、「なんでできないんだろう。悔しい。早く先生方のように診療できるようになりたい。」と思うようになりました。自分の中で学生と研修医では診療に対する意識が変わったと感じました。

まだ臨床経験も浅く、診療をしていると本当にたくさんの疑問や迷いが生じます。臨床は教科書通りにはいかないことも多く、経験豊富な先生方に相談するのですが、いつも丁寧に対応して下さいます。半年以上研修して思うことは、卒



研修歯科医同期と藤井教授  
写真撮影時のみマスクを外しました

後1年目でまだまだ学ぶことの多い私には、着実に、そして幅広い症例を学べる歯科総合診療科での研修が合っていたということです。研修期間中に学んだ知識と技術は土台となり今後の歯科医師生活でもきっと役立つものになると思います。そのため残りの研修期間でたくさんのことを吸収できるよう精一杯頑張りたいと思います。

4月からは大阪で就職させていただくことになりましたが、病院見学や面接はオンライン上でさせていただきました。就職先を探していた期間は新型コロナウイルス感染者が急増している時で、

新潟大学医歯学総合病院では職員の県外移動を制限していたためです。私が学生であった頃も面接や試験をオンラインで行っている同期が多くいました。

今後も新型コロナウイルス蔓延下で研修先を探す状況が続くかもしれませんが、オンラインなどの対応をしてくださる医院もありますので、学生の皆さんには興味のある医院、就職したいと思っている医院があるのであれば諦めずに頑張ってもらいたいと思います。





# Beyondコロナ

歯科研修医 高山 玲奈

新潟大学医歯学総合病院義歯診療科での研修を終え、現在、私は協力施設であるおざき歯科医院で研修しています。「コロナ禍」という、新潟大学歯学部に入學した当初は予想だにしていなかった事態を迎え、現在に至るまでのここ数年間は変化の多い数年間だったように思います。臨機応変な対応を余儀なく求められ、自身で考えて選択する大切さについてつくづく実感することとなりました。世間ではコロナ禍ということもあり、学生生活において様々な面で影を落とし、例にもれず新潟大学歯学部においても影響が及んでいることかと思えます。今回歯学部ニュースのページを執筆させていただく機会をいただき、今まで就職されたばかりの方のお話は初めてだとお聞きしましたので、昨年を振り返って想うことや現在の状況についてお話ししたいと思います。このページが皆さんにとって何かよい刺激になれば幸いです。

新型コロナウイルスの流行によって診療時の感染対策については対象が目に見えないものであるため、今までの感染対策について見直すと共に、気を引き締めて対応しておりました。

昨年は診療制限されていた時期があり、例年通りにはいかない状況でした。感染者も再び増加している時期だったので県外への移動に対して慎重にならざるを得ず、例年と比較した際に困難な点が見受けられたのは事実です。ただ、研修先の方々もオンラインで見学・面接するなど臨機応変に対応してくださるところが多く、私の場合は、学生時分からお世話になった先生方がおり、慣れ親しんだ環境で学べるという安心感があったこと、何より臨床実習中は学びの機会に恵まれ、環境も充実していたため新潟大学病院で研修することは決めておりました。義歯に興味があったこともあり、研修先を選ぶのに迷いは少なかったというのが正直なところでした。

その後、歯科医師として従事する日々の中で沢山の課題と向き合うこととなりました。義歯診療科での研修中、自身の知識と技術不足を目の当たりにして落ち込むこともありましたが、努力した分だけ診療に還元されていき、悩む時間も勿体ないくらいに充実した研修を送らせていただきました。患者さんから感謝のお言葉をいただいた時には、本当に頑張っただけよかったと非常にやりがいを感じました。その記憶は今でも思い出して励みにしています。

現在勉強させていただいている研修先の地域は口腔内の環境も厳しい方が少なくありません。なかなか思うようにいかないこともありますが、幅広い年齢層の治療を経験でき、指導してくださる先生方のサポートの元、私が描く理想像に向かって目下奮闘しております。

研修終了後は別の歯科医院にはなりますが大阪で就職させていただくことになりました。やはり私が就職活動をしていた時も感染者数が1日平均20～30名程度いましたが、自身で出来る対策を行い、覚悟をもって後悔のないよう行動しました。オンラインで見学・面接を行っている医院もあり、自身の責任は自身でしか負えないと思いますので、それぞれが自ら考え選択していくのがよいと思います。



仕事納めの日にいただいたお菓子

# Beyondコロナ

口腔生命福祉学科14期生 中村 夢衣

初めまして。新潟大学医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻博士前期課程1年中村夢衣と申します。昨年度までは口腔生命福祉学科4年次として臨床実習等に励んでおりました。今現在は社会人大学院生という立場で、病院歯科衛生士として勤務しながら学んでおります。今回の執筆にあたり、昨年度のコロナ禍における臨床実習・福祉実習、そして就職活動に関して、私の経験を述べさせていただきます。と思います。

昨年度の臨床実習はコロナ禍の最中でのスタートで、本来であれば4月から始まる予定でしたが感染防止の観点から課題レポートなどの代替実習から始まりました。病院実習が再開したのは7月末頃からで、実習することができなかった診療科もありました。診療科によっては、夏季休暇中に希望者は見学を受け入れるなど対応していただいた科もありましたが、就職活動や国家試験勉強などでその時間を取ることが難しかった学生も少なくはないかと思います。このようにマイナスな点が多い実習でしたが、コロナ禍だからこそ感染予防対策をしっかりと行わなければならなかったため、標準予防策の徹底や、清潔・不潔の区別を現場において学ぶことができたのは経験として非常に大きく、それが今の業務で実践できていると思います。福祉実習については、実習時期、実習場所によっては実習ができた学生とそうでない学生がいました。私は代替実習でしたが、代替実習でも実習担当の先生との週1回のディスカッションを通して、学ぶことは多くありました。このようにコロナ禍においても、できる限り実習ができるようにとご尽力くださった先生方にはとても感謝しています。

就職活動において、まず志望先の病院・診療所を見学するところから始まるかと思いますが、私

の場合、見学はせずに採用試験を受けました。もちろん病院側からはいずれは見学も可能になるというお話はいただいていたのですが、臨床実習中であり、県外への移動は避けるようにとのことで、見学することができませんでした。幸い、志望先に口腔生命福祉学科卒業生の方がいらっしゃったため、先生を通じて連絡を取り、そこで業務内容などの情報を得ることはできましたが、今就職してみても思うのはやはり百聞は一見に如かずという言葉通りで、見学はするべきであったと感じています。どういう業務を行っているのか、主にどのような疾患を治療対象としているのか、ということも重要ですが、職場の雰囲気を見ることも非常に大事かと思えます。また、交通の便など、職場の周りの環境も知ることも非常に重要であったと感じています。

簡単ではありましたが、私の学生時代の経験を述べさせていただきました。今後、就職活動をする学生の方の参考になれば幸いです。この度はこのような執筆の機会をいただき、ありがとうございました。



勤務先の入院患者に対し口腔ケアを行っている様子

# Beyondコロナ ～コロナ禍における臨床実習、国家試験、 就職活動について～

新潟市役所 鈴木 志 歩

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けた印象があります。当時私は口腔生命福祉学科4年生で、臨床実習の開始が見送られたまま4月がスタートしました。4～5月は緊急事態宣言が発出され、歯科臨床実習に参加することは出来ませんでした。毎日各科の課題に取り組む日々が続き、不安を感じていたことが印象に残っています。課題は各科の分野に関するものが多く、自分の苦手な項目を洗い出し、理解し直す良い機会になりました。6～7月は福祉臨床実習でしたが、何う予定だった外部施設から非対面での実習をするよう依頼があり、結果的に課題に取り組む形となりました。福祉現場の実際をみることは叶いませんでしたが、課題によって不足していた知識が明瞭となり、国家試験の勉強に身が入りやすくなりました。9月には歯科臨床実習が再開し、12月までの4か月間は歯科診療の現場で学ぶことが出来ました。例年に比べて実習期間は短かったものの、その分吸収しようと積極的に参加できたと感じています。

臨床実習に参加出来なかった4～7月は勉強に力を入れたことで、国家試験合格への大きな一歩になりました。私は、国家試験問題解説集とセットの資料本のみを用いて勉強しました。口腔生命福祉学科の先輩方の多くが利用していたこと、問題を解いた後に不足知識を補うことが2冊間で行いやすいと感じ選択しました。実際に問題を解いてみると、掲載されていない重要ポイントもあります。そういったものを直接、資料本に書き込むことで、1冊見ればポイントをおさらい出来るように工夫しました。早い段階で自分に合う勉強法を実践出来たことが合格に繋がった理由ではないかと思います。

就職活動もコロナ禍の影響を大いに受けました。見学等はあまり出来ず、ホームページを見る、パンフレットを取り寄せる、キャンパスライフ支援センターキャリア・就職支援オフィスにて進路相談を行うなどしました。特に就職支援の相談員さんにお世話になり、気持ちの整理や就職に向けて行すべきことを細かく相談することが出来ました。現在進路に悩む方は、ぜひ利用してほしいです。また、私は行政職志望であったことから、各自治体の試験を受けました。コロナ禍で試験日がずれる、会場や試験方式が変わるなどの変更が多くありましたが、試験で問われる内容は同じでした。試験を受けてみて、教養科目や専門科目の勉強を地道に続けることが大切であると感じました。面接では先生方に協力していただき、自信を持てるまで何度も練習を重ねました。今振り返ってみると、毎日の勉強やリサーチ、下準備の積み重ねが本当に重要であったと感じます。

今後も、まだまだコロナ禍に影響を受けることが予想されますが、私の経験が少しでも参考になれば幸いです。みなさんが充実した学生生活を送られることを願っています。



面接相談対応業務を行っている様子



---

# 早期臨床実習を終えて

---

歯学科1年 柏瀬 莉緒

前期に早期臨床実習があり、無事に終わることができました。臨床実習といっても、コロナ禍のため、実際に診療科を見学することはできませんでした。講義による各診療科についての理解と、一つの題に沿ったグループワークを行いました。

各診療科の紹介では、医歯学総合病院の歯科にある11の診療科について、その役割や診療の例などを、実際にその科でご活躍されている先生方に紹介していただきました。放射線科や麻酔科、その他名前を聞いただけではどのようなことをするのか想像しにくい科についても、対象となる患者さんや治療内容を丁寧に教えていただきました。より専門性の高い歯科治療を知り、歯科医師への道を歩む上で気持ちが引き締まったように思います。

グループワークでは、「専門診療科の必要性について考察する」というテーマについて、歯学部1年生の中で無作為に振り分けられたグループのメンバーと話し合い、意見をまとめ、最後の授業で発表を行いました。以前まで、専門診療科の意義について考えたことがありませんでしたが、その在り方を追究する良い機会になりました。私たちの班では、専門診療科が必要であるという主張のもと、なぜ必要か、またあることによるデメリットとその解決策について考察しました。デメリットを挙げる際に、科の多さから切り込む人もいれば法の整備の面から切り込む人もあり、全く考え方が異なる人同士で意見を交わすことで、知識や考えを深めることができました。他の授業はオンラインで行われる上に話し合う場があまり設けられないので、画面越しではありましたが、顔を合わせて話すことができ、少しでも同期と話す貴重な時間となりました。

例年のように実際に診療を見たりすることができなかったのは心残りではありますが、コロナ禍

だからこそその貴重な経験ができたと思います。新潟大学歯学部の特徴の一つである早期臨床実習をなんとか実現すべく、内容を考え実行してくださった先生方に感謝いたします。

口腔生命福祉学科1年 東 七 愛

1年時の早期臨床実習では、新潟大学医歯学総合病院の各診療科の先生方の講義を聞いたり、1グループ10人に分かれて「専門診療科の必要性」について討論し、そこで出た結論を学年全員の前で発表したりしました。

各診療科の先生方の講義では、大学病院ならではの高度で専門的な内容を学ぶことができました。実際に行った治療法や患者さんの治療後の経過観察のお話を聞いて、歯科医師・歯科衛生士は歯学だけでなく、身体全体の構造についても深く理解している必要があると分かりました。また、自分でインターネットや書籍で調べるだけでは分からない、実際の医療現場のお話も聞ける大変貴重な機会であったように思います。

グループでの「専門診療科の必要性」についての討論は、全国の大学病院の専門診療科について自主的に調べる良いきっかけになりました。そこで、私たちのグループは全国の大学病院の特色ある専門診療科について調べ、それが設置された理由について考えました。さらに、そこから専門診療科を設置することのメリット・デメリットについて考察することにしました。全体発表に備え、少子高齢化などの時代背景も考慮し、自分たちが導き出す結論に聴衆が納得できるような根拠を持たせるように意識しました。このグループワークを通して、専門診療科についての知識はもちろん、自分たちの主張をどう展開し、発表すれば分かりやすく伝わるかといったプレゼンテーション力も身につけられたように思います。また、全体

発表ではそれぞれのグループが異なる切り口で自分たちの主張を展開しており、聞いていてもとても勉強になりました。

前年に続き、新型コロナウイルス感染拡大防止のため新潟大学医歯学総合病院での実習を行うことは出来ませんでした。この状況だからこそできる充実した学びができたのではないかと思います。そして、今年学んだことを来年度につなげていきたいです。

### 歯学科3年 水 上 大 河

早期臨床実習Ⅱは3年前期に行われたものですが、あまりに充実したカリキュラムの影響からか気づけば後期も半分ほど終わっていました。当時は本当に大変だった人体解剖学実習ですらもはや懐かしさを感じる程に濃密な日々を過ごしている訳ですが、そんな今でも印象に残っている早期臨床実習の内容を2つ振り返っていこうと思います。

まず一つは、編入生である私にとって今回が初めての早期臨床実習であったということです。幸いなことに私はこれまで大学病院のお世話になるような大病も経験してこなかったため大学病院という建物にも不慣れで、初回の実習では特に緊張してしまっただけを覚えています。そんな中でも周りを見渡すと真っ当に入学してきた同期たちは涼しい顔で院内を移動しており、1年生の頃の早期臨床実習Ⅰの経験値がとても活かされていると感じました。臨床の現場の空気感に慣れることができるというだけでも、新潟大学で早期臨床実習を経験できるメリットは大きいと実感できた出来事でした。ちなみに全員が編入生であった私たちの実習班は、初回の実習終了後帰り道がわからず迷子になりました。

二つ目は、この実習の狙いでもある基礎科目と臨床との繋がりを意識できたということです。これについては、基礎科目を学んでいくのと同時進行で臨床を体験できたことが大きいと思います。例えば、人体解剖実習で頸部の解剖を経験した直後に放射線科の実習で自分の頸部のエコー画像を

見ることができたり、歯周病科で炎症や歯槽骨吸収の概要を紹介してもらってから、その詳細を口腔生化学の授業でさらに深掘りしたりなど、基礎と臨床の2つを同時に意識しながら学習を進めることができた期間でした。後期に入って臨床科目や実習が増えてきた今ではこれまで学んできた基礎の内容が頭から抜け落ちそうになりますが、臨床における基礎の重要性を早期臨床実習で体感したことを思い出しながら、今後さらに激しさを増していくであろう歯学部での講義や実習の数々に食らいついていこうと思います。

### 口腔生命福祉学科2年 近 藤 風 希

今年の早期臨床実習はコロナ禍の影響で残念ながら全て実際現場に行き、体験することはできませんでした。ですが、講義などを通して歯科衛生士や社会福祉士についての知識や理解を深め、自分たちは将来このような仕事をするのだという自覚が芽生えたと思います。今後の授業や実習にも繋がる大事な事を学ぶことができ、とても意味ある時間になったと感じました。

特に印象に残ったことは、新潟医療センターに実際に行って病院で働いている歯科衛生士さんの話を聞いたことです。周術期の患者さんの口腔ケアがとても大事で、口腔ケアを行うことで治療の効果も上がることや、認知症や寝たきり、車イスなど様々な状態の患者さんの治療など一般の歯科医院とは違う仕事内容を知ることが出来ました。今まで歯科衛生士の働く場所と言えば歯科医院という印象が強く、病院で行う歯科衛生士の業務についてあまりわからなかったのですが、具体的にどういったことに取り組んでいるのかを考えているのかを知ることができ、質問などもでき、とてもいい経験ができたと思います。

他にも、実際に児童相談所に実習に行き、保健所やばんだい桜園について講義を受けてそれぞれの場所での歯科衛生士、社会福祉士の役割について学ぶことができました。同じ職業でも働く場所によって業務がかなり変わるということがわかり、自分が思っていたよりも仕事の幅が広く、た

くさんの人に関わる職業だということを理解できました。

また、バイタルサイン測定や診療ユニットの使い方や実習室の見学、感染予防対策など、これから実習を進めていくうえで基礎となるようなことを学ぶことができました。医療従事者を目指している中で、これらのことは知識として身につけ、実際に行動できるようにしておくべきことだと感

じました。

この授業を通して、様々な場所での歯科衛生士、社会福祉士の仕事内容、役割について具体的に学び、理解を深めることが出来ました。今回この早期臨床実習で学んだことをこれから大学での勉強や実習に最大限活かして残りの時間を無駄にしないよう過ごしていきたいと思います。





---

# ポリクリを終えて

---

歯学科5年 佐藤大地

長かった5年生のポリクリを終えて、現在は臨床実習の引き継ぎ期間です。あっという間のポリクリからCBT、OSCEと段階を踏んで、今度は本番、患者さんに治療を施す立場になりました。実際の患者さんを目の当たりにすると、ポリクリで習った一つ一つの治療行為に緊張感があり、自分の行動を見つめ直すことができました。

ポリクリとは臨床予備実習、つまり臨床実習に上がる前に必要最低限の知識・技術・態度を習得する実習です。実際には各診療科を回って、講義や模型実習、学生や先生を相手にしての実習があります。講義や模型実習は4年生までに経験していましたが、人間を相手にする学生間の相互実習は初めてでした。特に学生間の相互実習では、印象採得、伝達麻酔の2つが印象に残っています。

模型でやる印象採得は、ただ材料を練ってトレーに持って、模型の口の中に入れれば問題なかったと思います。しかし、実際の間で行うとそううまくはいきませんでした。実習の被験者としてまず思った事ですが、印象材が口に入っているととても息苦しい、不快な印象を受けました。口を開けている間、唾液が飲み込みにくく溺れそうになりました。また、トレーの側縁が頬粘膜や歯肉に当たって、押し付けてられている間は痛い思いをしました。術者としては、材料が柔らかすぎると患者の喉の奥に流れてしまいそうだったので、高齢者など嚥下能力の低下した患者には特に気をつけないといけないなど実感しました。

伝達麻酔は本当にドキドキでした。前日から落ち着かず、何度も実習書を読み返してはイメージトレーニングをしていました。実習当日、いざ伝達麻酔をする時になったら、意外にも冷静に麻酔を打てたことに驚きました。前日のイメージトレーニングが効いたのか、実習書をよく読んだからなのか、麻酔を打つ相手が友達だったからなの

か、わかりません。ただ、あの時の緊張感は忘れることはないと思います。一步間違えれば医療事故です。緊張感を保ちつつも冷静でいられることが大事だと感じました。

ポリクリで習ったことはどんなに小さなことも無駄にはならないと思います。臨床実習はまだ始まったばかりでまだまだ未熟ですが、ポリクリやCBT・OSCEを含め、これまでに習得した知識・技術・態度をもとに実践し、さらに磨きをかけていこうと思います。



通学路のやすらぎ堤

歯学科5年 花森玲奈

テストや課題、実習などに忙殺され、気がつくとならぬと新潟大学歯学部に入學してから5年半の月日が過ぎていました。5年生になってからはポリクリ、CBT、OSCEなどの大きな学業イベントがあり、さらに忙しい日々を過ごしていたように感じます。それらを終えた10月の現在、ポリクリについて振り返るとともに、この体験記が後進の歯学部生の参考になればと思います。

ポリクリとは病院の各診療科をまわって行われる実習のことで、それぞれの科では臨床を意識したような実習内容が用意されています。私たちの

場合は、コロナ禍であるという情勢を踏まえて、いくつか制限のある中でポリクリが始まりました。ポリクリの特色であり、これまでの実習と大きく違うのは、相互実習があるということです。概形印象、精密印象、筋圧形成、浸潤麻酔、伝達麻酔、スケーリング、フッ素塗布、X線撮影等々…基礎的な歯科の手技を生徒相手に実践で行うことができます。これまで散々模型で行ってきたことや、「こんな簡単だろ」と思っていたことでも、実際に人にやってみるとかなり難しいとわかることがほとんどでした。思ったようにできず、落ち込むことも多々ありました。しかし、そういう時には先生方のご指導や友人からアドバイスなどによってなんとか実習を進められたりもしました。

また、相互実習なので自分自身が患者役になることももちろんあります。その時に、「意外とこ

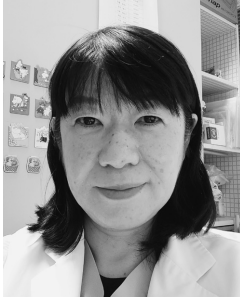
の動作が痛い」「口をずっと開けているのが辛い」など患者さん目線になって初めて学ぶことも数多くあり、歯科治療をあまり受けたことがあまりない自分自身にとっては特に有意義でした。

さらにポリクリは少人数の班で実習を行うので、一人あたりの先生方の人数が多いというのも良い特色で、とても質問がしやすい環境下にあったと思います。どうしてもうまくいかない時に先生方に指導を仰ぐと、臨床経験を積んだ先生ならではの知識やコツも得ることができました。

ポリクリを終えた現在、実際の患者さんを相手に行う臨床実習を目の前に控えています。目指す歯科医師にまた一步近くことができるという嬉しさの一方で、患者さんに対する責任や自身の未熟さから大きな不安も抱えていますが、ポリクリで得た技能・知識・態度を大いに生かし、これからもまた頑張っていきたいと思います。



# 素 顔 拝 見



歯科麻酔学

佐藤 由美子

“患者総合サポートセンターの佐藤です。”と言っても、この歯学部ニュースの読者の多くの方にはあまり馴染みがないかもしれません。元々は歯科麻酔を専門としていた私ですが、今は主に患者総合サポートセンター（通称：患サポ）で、附属病院の医科診療科に通院中で歯科治療を必要とする患者さんを、受診へと橋渡しをする仕事をしています。

歯科麻酔科の私がなぜ？と思われるかもしれませんが、学問としての歯科麻酔学には全身疾患を持つ患者さんが安全な歯科治療を受けられるようにマネジメントするという側面もありますので、決してかけ離れたものではありません。麻酔を専門にしてきたことで得られた知識を役立てられればと思い仕事をしています。とは言え全く手術麻酔から離れたわけではなく、週1回ですが、中央手術室で全身麻酔をはじめとする業務にも携わっています。

出身は長岡市で、高校を卒業するまで中越地区で過ごしました。すっかり新潟市での生活が長くなりましたが、中学・高校を過ごした長岡の街を時折訪れるたび、当時を懐かしく思い出します。

冬の長岡市は魚沼地区には及ばないものの、それなりの積雪があります。学生時代は割と本気のスキー授業がありました。友人や家族ともスキーに出かけましたので、当時は少くらい滑れるようになった気になっていましたが、大学卒業後はすっかり足が遠のいていました。それが数年前、

外勤先の先生やスタッフに誘われて、久しぶりに滑ったスキーの気持ちよさにすっかり魅せられてしまい、今では冬の雪が待ち遠しいほどです。“あなたの趣味は？”と聞かれば、ためらわずにスキーです、と答えるでしょう。

昨年からはスキーをするために筋トレがたくてジムにも入会しました。残念ながら最近は少しサボりがちで、夫からの“ジムに課金してるだけじゃないの？”という言葉が胸に刺さります。COVID-19の感染拡大が落ち着くまでは難しいと思いつつも、冬の便りを聞き始めるとなんとなくソワソワする毎日を送っています。

座右の銘、というほどではないですが、“あきらめたらそこで試合終了ですよ？”という、漫画“スラムダンク”の安西先生の言葉を心に留めるようにしています。

医学の進歩は、以前なら助けられなかった多くの命を救い、人はすいぶん長生きするようになりました。“一病息災”ではないですが、今、大病院の歯科を訪れる患者さんの多くは、何かしらの全身疾患を抱えており、合併症を持つ患者さんを診療する機会は格段に増えています。

“どうすれば患者さんに安全で快適な治療を提供できる？”

そんなことを患者さんに向き合うたびに思います。

難しいことも多いですが、安西先生の言葉を胸に秘めつつ、その人にとってのベストと一緒に考えられるような医療者でありたいと思っています。

どうぞよろしく願いいたします。



2021年11月  
中央手術室にて







## 顎口腔インプラント治療部

高 嶋 真樹子

こんにちは。顎口腔インプラント治療部の高嶋真樹子と申します。病院の中央診療部門所属で、学生さんとは接点がほとんどないと思いますので、今回は簡単に自己紹介をしたいと思います。

出身は千葉県柏市です。進学を機に新潟に住み19年目となります。新潟の湿り気が多くて曇りがちな静電気が起きない気候は、暑いのが苦手な私の気性にも合っていたようで、冬の寒い横殴りみぞれ雪の日でも上下防水パーカーを着用して濡れずにウキウキで通勤しています。住めば都とはこのことですね。

さて、私は研修歯科医終了後の2009年4月に顎口腔インプラント治療部の前身である顎関節治療部に入局しました。当初は大学院へ進むつもりは微塵もなく、卒後2-3年目は外来診療ばかりが楽しかったために顎関節症・インプラント・補綴の治療をひたすら行っておりました。なにしろ当医局のミニマムリクワイヤメントは、顎関節症と口腔インプラントと補綴歯科の専門医（あるいは専修医）を3つ取得するといったものなので、それはもうやりがいがあります。しかし卒後4年目くらいになると、ただ診療を行うだけではなく外来の医療現場で感じた疑問や気になることについて、さらに知識を深めていきたい、そのことを患者さんへ還元したいと感じるようになりました。そこで、卒後5年目に社会人大学院に入学し、顎関節症の筋活動に関する研究と、インプラントの予後に関わる因子の研究を行うようになりました。卒業後も現在に至るまで、継続して臨床に直結した研究を行っています。

普段の生活では、その時期折々の季節を感じられるようなことを楽しみながら美味しいものを食べることが大好きで、食に貪欲に生きております。春の始まりのころにはお雛様を飾りながら山菜や春野菜を食べ、梅雨には梅シロップ漬けを作

成し、苦手な暑い時期は大葉とショウガの効いた鯔のなめろうを好物として、乗り切ります。秋は低山登山や飼っている犬を連れてキャンプに行きます。屋外の食事は何を食べても美味しいですね。冬は海を見るのが好きです。荒々しい波が海岸へ打ち付けてはひいていく様子を見てみると、心の中で起きていた波は、逆に穏やかになり、すっきりとした気分になります。幸い自宅から海も近いので、寒い冬の休日の朝に海鳴りがかすかに聞こえるだけで落ち着きます。そんな自宅で家族と、釣り方によるスケソウダラの鮮度の違いや、寒ブリの刺身の厚さによる食味の違い、またハタハタの産卵場所と時期について調査しており、食に関する知識を少しずつ蓄えていくのが楽しみとなっています。

上記だけ読むと、食べるのが好きなだけの人みたいですが、それ以外に、近世～近代にかけての建築物や庭園を見たりすることをするのも好きなことのひとつです。次の素顔拝見の機会があれば、ぜひその魅力についてもご紹介したいと思います。



## 医療連携口腔管理治療部

曾 我 麻里恵

2020年10月より医療連携口腔管理治療部に配属となりました、曾我麻里恵と申します。

出身は新潟市で新潟大学歯学部42期生です。卒業してまだそんなに経ってないつもりでしたがもうそろそろ10年になってしまう事実を前に、月日の流れの恐ろしさを感じるばかりです。

学生時代は軽音楽部に所属させていただいていましたが、ギターのFのコードを抑えられないという初心者が最初にぶち当たる壁に見事に激突し「これは向いてないな」と早々に楽器を諦め、所

属期間中ほぼボーカルに専念させてもらっていました。わりと好き勝手させてもらっていたので当時のメンバーや部員みんなには感謝です。

卒後、進路をぼんやり考えていたところで軽音部の顧問であった林先生から「うちが向いていると思うよ」とお声がけいただき、歯科放射線科に入局し、診療や研究に携わらせていただきました。入局当時は何をもって向いていると判断してもらえたんだろうと疑問でしたが、放射線治療患者さんの口腔管理の仕事をさせていただき始めて、悟りの如く「なるほど、これだな!!」とやりがいを見つけることができました。特に頭頸部放射線治療患者さんは治療期間も長く、大変な思いをしながら治療を頑張っていることが多く、歯科医としてその手助けをしながら一緒に困難を乗り越えていくのはお互いに達成感がかなりあります。

それから放射線治療や化学療法を行う患者さんの口腔管理をメインに仕事をさせていただき、このたび2020年に設立された医療連携口腔管理治療部に所属させていただく機会を得ました。自分が最もやりがいを感じた周術期口腔管理をやらせていただけており、仕事に対して毎日「楽しい」と感じることができています。医科歯科連携がどんどん進み、患者さんも増えてきており、スタッフ一丸となって毎日診療に明け暮れる日々です。当部と一緒に働いてくださる方を常に待っていますので、ご興味のある方はいつでもお声がけください。

ところで私の趣味というか生きがいは好きなバンドのライブに行くこととそれに合わせて旅行をすることだったのですが、このコロナ禍でバンドはほぼ活動休止状態になりライブ予定も丸1年以上白紙が続き、旅行そのものも自粛せねばならず、私生活における楽しみが何一つない虚無の期間を過ごしています。他の趣味も特に見つけられないので飼っている猫に対してひたすらウザ絡みをする日々を過ごしていましたがこの夏に重度のアレルギーを発症し、その際の検査でついに「猫アレルギー」の烙印を押されてしまいました（発作自体は猫が原因ではなかったのだけが幸いでし

た)。猫のいない生活はありえないので毎日アレルギーの薬を服用し、月に1回猫を洗いながら共存しています。洗われるのを全く嫌がらない子でよかったなあと思います。良い子です。

この記事を書いている時点では世の中かなり落ち着いてきており、自粛もわりと緩和されてきているので来年こそは仕事も趣味も充実した生活を送れるようになるといいなと願うばかりです。皆様今後ともよろしく願いいたします。



歯科矯正学分野

大森裕子

令和3年1月1日より歯科矯正学分野の助教を拝命しました、大森裕子（おもり ゆうこ）と申します。「素顔拝見」への寄稿の機会をいただきましたので、拙い文章で大変恐縮ですが、自己紹介をさせていただきます。

私は新潟県のどまんなか・見附市で生まれ、長岡市と三条市に囲まれた田んぼの多い、のどかな田舎町で育ちました。周りに医療関係者はおりませんでした。娘に手に職をつけさせたいという母の願い50%と、白衣の仕事はカッコいいなというなんとなくのイメージ50%で歯科医師になることを志しました。オープンキャンパスで感じた東京歯科大学千葉キャンパスの、のびのびとしながら充実した環境に惹かれ同大学歯学部へ入学しましたが（現在は東京都千代田区神田へ学部再移転）、程なくして学ぶことの多さと幅広さ、実習の難しさ、何より進級試験のプレッシャーに幾度と無く挫けそうになりました。そんななかでも同級生同士励まし合い、体育会系で熱意に溢れた先輩や先生方による手厚い指導に支えられて、無事歯科医師になることができました。

臨床研修は、一般的な歯科治療を網羅的に経験したいという考えから、新潟大学歯科総合診療部で1年間お世話になりました。私の出身大学では

病院実習で学生が担当患者を持たせてもらえるということはなく、診療アシストや見学がメインでしたので、学生時代すでに自ら主体となって治療を経験している新潟大学出身の同期と自分とを比較しては不安や焦りを感じていたことを覚えています。当時の担当ライターの先生には、外部からきた自分を区別して懇切丁寧に指導していただき、前を向いて研修に臨むことができました。

臨床研修修了後には、自分の強みとなるような専門性を身に付けたいという点と、ひとりひとりの患者さんと長く向き合えるという点から矯正歯科を学びたいと思い、縁あって新潟大学歯科矯正学分野に入局させていただきました。矯正治療では、ひとりの患者さんの初診から管理が終了するまでの経過が長く、個々の状態が非常にバリエーションに富んでおり、成長発育の要素が複雑に絡み合うことからトレーニングに必要な期間が長く、現在においても判断に迷うことに日常臨床で多々遭遇します。それでも入局してから9年目のいままでの間に、患者さんの第Ⅰ期治療を担当してから第Ⅱ期治療、その保定が終了して終診するまで担当できるよう、医局の先生には育てていただきました。わからないことが理解できるよう、できないことができるようになるまで根気強く、向き合っていたいただいたことにこの場をお借りして感謝申し上げます。歯科医師を志してから現在に至るまで多くの尊敬する先生に出逢い、叱咤激励いただき、返し切れない程の御恩があります。「受けた恩は後輩に還元すべし」、先輩方がおっしゃっていた言葉です。これまでに自分がいただいたものを、これからは少しずつでも後輩に返していけるよう、日々の臨床・教育・研究に邁進していく所存です。今後とも宜しくお願い致します。



小児歯科学・障がい者歯科学分野

笹川 祐輝

2021年4月より、小児歯科学分野の助教に拝命いただきました笹川祐輝（ささかわ ゆうき）と申します。この度、歯学部ニュース編集ご担当の先生より「素顔拝見」の原稿作成につきまして貴重な機会をいただきましたので、簡単に自己紹介をさせていただきますと思います。

生まれは神奈川県横浜市、その後父の仕事の都合で様々な土地を転々となりました。ここでは説明しようとすると少々長くなってしまいますが、横浜（出生～1歳）→アメリカ（1～7歳）→横浜戻る（7～10歳）→千葉（10～12歳）→新潟（12歳～現在まで）という経緯になります。このややこしい経緯のため、「出身はどちらですか？」という、普通なら簡単に答えられる質問に少々考え込んでしまいます。生まれたところ？幼少期を過ごしたところ？「新潟です」と答えてしまうのが面倒にならないのでそうしていますが、本当は生まれ育った土地ではありません。すみません。

高校卒業後、現役で入学したのは新潟大学教育学部（理科教育専修）でした。歯学部が第一志望でしたが圧倒的に偏差値が足りず、冒険できない性格の私は安全志向の受験することになります。歯科医師が無理なら、子どもと関われる幼稚園か小学校の先生になりたいと思っており、そのため履修を進めましたが、次第に第一希望の歯学部受験に挑戦できなかった心残りを強く意識するようになりました。そして同年夏頃から、「休学せ



ず単位取得を進めながらこっそり歯学部再受験の勉強も進める」を決意します。この方法なら、歯学部受験に失敗しても何も失うものがないので、ノンプレッシャーで挑戦できると考えたからです。半ば歯学部を諦めるための記念受験でもありましたが、合格発表の日に自分の受験番号を発見した時の衝撃は今でも鮮明に覚えています。

歯学部入学後、様々な専門診療科について学び中で最初に魅かれたのが小児歯科でした。教師の道を捨て、歯科医師を選べば子どもと関わる仕事はできなくなると勝手に思い込んでいた私にとって、最も魅力的な診療科でした。

数々の試験に悪戦苦闘しつつも何とか歯科医師免許を取得し、研修を終えた後に、小児歯科学分野へ大学院生として入局させていただき、今に至ります。大学院生時に取り組んだ研究テーマは、小児の摂食動作を口唇圧と三次元動作解析の観点から解明を行うものです。学位を取得した現在も、より発展的な知見を得るため、この研究に励んでおります。

臨床、研究、そして教員としての仕事に従事しながら、現在は障害者歯科学会の認定医取得と小児歯科学会の専門医取得に向けて日々の診療に邁進させていただいております。

最後になりましたが、私の専門である小児歯科学を通して歯学部、歯科界において何かしら貢献できるよう、これからも様々なことに挑戦していきたいと思っています。拙文ながら、最後までお読みいただきありがとうございます。どうぞ今後ともよろしく願います。

✿



摂食嚥下リハビリテーション学分野

那小屋 公太

2021年4月1日付で摂食嚥下リハビリテーション学分野の助教を拝命致しました、那小屋公太(なごやこうた)と申します。摂食嚥下機能回復

部の助教を3年程務めておりましたが、本年度より歯学部で職務に励む機会を頂きました。今回、素顔拝見執筆の機会を頂くことができましたので、この場をお借りして自己紹介をさせていただきます。

出身は秋田県秋田市です。苗字の“那”という漢字が沖縄の“那覇”を連想させるらしくよく沖縄出身ですか??と聞かれますが先祖代々生粋の秋田県民です。しかし、この“那小屋”という苗字は珍しく、全国でもうちの家系しかいないそうです。なので“那小屋”という苗字をみかけたら全員私の親族だと思ってください。そんな家に産まれた私ですが、地元の秋田高校を卒業後は、全国を転々としておりました。実家が薬局ということもあり医療系の職を志していたのですが、予備校に通うために移住した東北6県憧れの大都会“仙台”は田舎者の私にとって魅力的過ぎ、勉強もせずに遊び呆けてしまいました。その結果、医療系をあきらめ、金沢大学理学部に入学したわけですが、これがまた自分には全く合わず1年足らずで中退してしまいます。仙台に戻り今度こそはと真面目に勉強し、なんとか入学した先が北海道大学歯学部でした。大学ではバトミントン部に所属し、学業との両立を目指し日々鍛錬しておりましたと言えればかっこいいのですが、残念ながらそんな生活は一切送っておりません。このご時世あまり大きな声では言えないのですが、まずよく酒を飲みました。16時15分に授業が終わるのですが、終わったとたん爆チャリし16時30分にはアジア最北の大歓楽街・すすきの(映画『探偵はBARにいる』から引用、大泉洋がナレーションで言っていました)に到着(早めにお店に入ると安いんです)、夜中まで梯子酒。今思えば若さが為せる技ですが、同期と過ごした楽しい時間はかけがえのない思い出です。

北海道は美味しいものが沢山あります。ジンギスカン、ホッケ、ラーサラ、花まるの寿司など数えきれない程おすすめのものがあります。そんな環境で生活を送った影響もあり飲み食い非常に好きな私は、病棟実習で口腔癌術後の摂食嚥下障害患者さんを初めて目の当たりにした際に衝撃を覚えたのを今でも鮮明に覚えています。“食べる

ことができない”患者さんがいる、しかも歯科の患者さんでいる。それ以来、私は口腔全体を“機能的”に見ることができる『摂食嚥下リハビリテーション』という学問に非常に興味を抱きました。北大病院で臨床研修を終了した私は、口腔関連疾患以外が誘因となる摂食嚥下障害を学びたいと思い、昭和大学歯学部口腔リハビリテーション医学部門に大学院生として入局。研究のため配属された口腔生理学教室での研究生活があったおかげで私は臨床と研究を両立できる機会を求めて大学院終了後、新潟大学へ入職しました。新潟大学へ入職してはや5年近く経ちますが、この5年間は同じ志を持つ仲間たちと切磋琢磨し、とても密度の高い充実した日々を送っています。

私は全国を転々としておりますが、今が一番心地良いです。新潟大学歯学部、摂食嚥下リハビリテーション学分野への発展に少しでも貢献できるような日々邁進していく所存です。今後ともよろしくお願い致します。



摂食嚥下リハビリテーション  
学分野

吉原 翠

## 助教に就任して

2021年4月1日付で摂食嚥下リハビリテーション学分野の助教を拝命いたしました吉原翠（よしはら みどり）と申します。このたび「素顔拝見」執筆の機会をいただきましたので、自己紹介と近況を述べさせていただきます。

出身は新潟県下越地方に位置する新発田市です。読みづらいですが「しばた」と読みます。

新潟大学歯学部歯学科に45期生として入学し、卒業後は本学研修プログラムAコースの歯科総合診療部での臨床研修を経て、本学大学院に進学し

ました。大学院では摂食嚥下リハビリテーション学分野の井上誠教授・辻村恭憲准教授のご指導のもとで、「咽喉頭酸逆流によるTRPV1の持続的活性化およびそれに伴う機械刺激誘発性嚥下の変調」について研究を行い、現在も関連した研究を継続しています。

TRPV1は、熱刺激に応答する温度感受性イオンチャンネルの一つであり、温度刺激の他、カプサイシンの辛味刺激や酸刺激・痛み刺激を受容する性質が知られています。今年のノーベル生理学賞受賞者はこのTRPV1を発見したDavid Julius教授と、機械刺激を受容するイオンチャンネルPiezo1・Piezo2を発見したArdem Patapoutian教授でした。彼らの発見から温度・疼痛・圧力を感じるメカニズムについて飛躍的に研究が進み、慢性疼痛の治療等の臨床にも役立てられています。

大学院生の時には訳も分からず始まった研究でしたが、このような基礎的な発見を経て、自分の学位研究を含めた数々の実験が、そしてその先に臨床が成り立っているのだと思うと、微力ながら研究に携わる身として、非常に感慨深いものがございます。

最近の出来事としては、2021年8月に日本学術振興会の海外特別研究員に採択されました。来年度以降に渡航の予定ではありますが、世界的なCOVID-19感染拡大の影響を受け、出発時期は決まっておられません。場所は以前に当分野の辻村恭憲准教授が留学されていた、ジョーンズホプキンス大学のAsthma & Allergy Centerの予定です。大学があるのはメリーランド州のボルチモアという街ですが、留学経験のある先生方のお話では、なかなか治安が悪い地域ということです。生まれてこの方新潟県下越地方以外で暮らしたことがない人間が、アメリカで無事にサバイバルできるだろうかと不安を感じることもございますが、研究のみならず多くの面で成長できる機会と信じ、励んでまいりたいと存じます。

最後に、未熟者ではございますが歯学部の発展

に貢献できるように精一杯務めさせていただき  
ますので、今後ともご指導ご鞭撻の程何卒よろしく  
お願いいたします。



#### 口腔生命福祉学講座

松本 明日香

本年4月1日付で口腔生命福祉学講座の助教を  
拝命いたしました松本明日香と申します。

この度、素顔拝見の執筆の機会を頂きましたの  
で、この場をお借りして自己紹介させていただきます。

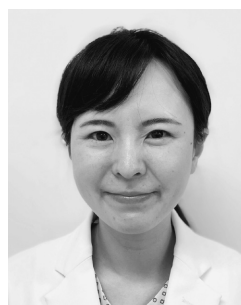
出身は五泉市（旧村松町）で、高校までは田ん  
ぼと山の景色の中で育ちました。本が好きだった  
ので、高校卒業後は早稲田大学文学部に進学し、  
日本文学（主に近代）を勉強し、社会人となりました。  
そして30歳を目前に控え、「なにか資格で  
も取ろう」と思い立ち、新潟市西区の明倫短期大  
学歯科衛生士学科に社会人入学しました。それま  
では本一辺倒な生活でしたが、10歳も年の離れた  
同級生と一緒にまったく畑違いの歯科衛生士の勉  
強をするのはとても新鮮でした。

そして短大卒業後、もう少し勉強してみよう  
と思い、口腔生命福祉学科に編入しました。新たに  
福祉の勉強と、4年次には臨床実習も加わって忙  
しい学生生活でしたが、仲間や先生に恵まれ、充  
実した学生生活を送ることができました。卒業後  
は大学院に進学し研究を進める傍ら、未就学児対  
象の療育教室に勤務し、発達障害のお子さんの療  
育支援に携わりました。音楽や手遊び、体を動か  
す遊びなどを通して、お友達とのかかわり方や集  
団生活でのルールを身に着けられるように支援を  
行っていました。日々子どもたちと追いかけてこ  
をしたり、お散歩に出かけたりするので、イン  
ドアな私にとっては、これまでの生活で一番体を動  
かす毎日でした。そんな風に日々一緒に過ごして  
いた子どもたちを小学校に送り出すことができた

のは、とてもいい思い出です。

療育教室を家庭の都合で退職したのちは、雪国  
新潟県から南国沖縄県に引っ越しました。沖縄で  
は、市役所の障害福祉課に相談員として勤務し、  
いろいろな年代の方の相談支援に従事しました。  
新潟から引っ越した身にとっては、沖縄の暑さや  
風習に戸惑うことも多かったのですが、市役所の  
相談員の同僚たちに助けられ、新しい仕事の中で  
障害福祉を学ぶことができました。

そしてご縁があり、本年4月から口腔生命福祉  
学科の助教として大学に戻り、現在に至ります。  
学部生のころからお世話になっております講座の  
先生方にご指導いただき、4月からは通所福祉施  
設の知的障害者の方々を対象に、よりよい歯科保  
健指導ができないかと模索しています。これまで  
学んできた歯科衛生と福祉という分野横断的な研  
究ができ、忙しくも充実した毎日を送ることが  
できています。この恵まれた環境で仕事ができる  
ことに感謝しています。今後は歯学部や口腔生命  
福祉学講座の発展に貢献できるよう努力してまい  
ります。どうぞご指導の程よろしくお願いいたし  
ます。



#### 生体組織再生工学分野

鈴木 絢子

2021年4月より高度口腔機能教育研究センター  
の特任助教を拝命致しました、鈴木絢子です。素  
顔拝見執筆の機会を頂きましたので、この場をお  
借りして簡単に自己紹介をさせていただきます。

私は、新潟県五泉市の出身で、水が綺麗で、山  
と田んぼに囲まれた自然豊かな地に生まれました。  
小学校の登下校には公園や林があり、木登り  
したり、お花を摘んで帰ったり、下校時間をとっ  
くに過ぎていくのに帰宅しないため、母はよく心  
配していました。中学生になっても、毎日部活と  
生徒会活動に明け暮れ、夏場は川に行けば友達が



いたので、部活帰りに川で遊んで帰り、冬場は授業返上で雪遊びと、常に自然と触れ合い成長してきました。このような環境で育ったことで、好奇心旺盛で細かいことは気にしない性格になりました。

中高生頃からすでに、好きなことはとことん追求し、嫌なことはできたらやりたくない…という偏ったところもあり、理系科目は得意だったことから、高校生時代は研究職もいいなあ、なんて夢をみたこともありました。父は進路についてよく相談に乗ってくれて、「女性は結婚や出産もあり、資格はあったほうが生きやすい」という考えや、歯科医師であり薬剤師である父の経験と私の興味から、薬学部と歯学部を目指しました。

結果的に歯学部を選択し、大学院から新潟大学小児歯科学分野に入局しました。もともと子供が好きだったからこそ、「歯医者には子供から嫌われる職業かあ…」と小児歯科を何となく敬遠していた頃もありました。しかし、入局後は考えを改め、「子供も一緒に楽しめる歯科治療を行う」ことが私の中で目標となり、2015年より6年間、小児歯科学分野にて臨床を行っておりました。小児や障がいを持つ患者さんとの治療は体力も精神力も消耗しますが、それ以上に楽しさややりがい、治療への情熱が勝り、私には合っていたんだなあとつくづく感じております。

それと同時に大学院では生体組織再生工学分野を専攻し、泉健次教授のもと、新規培養口腔粘膜の開発の研究を行っておりました。高校生の時に一瞬夢見た研究をまさか歯科医師になってから行うとは思っておらず、当初は右も左も分からない状態でした。しかしながら、大学院で研究を進めていくうちに、どんどん深みにはまっていき、結果が出た時の何とも言えない興奮、アドレナリンが出る感覚は経験しないと分からないものだと思います。大学院卒業後も臨床の傍ら研究を継続し、今年度は研究メインで活動を続けております。

私生活では、結婚後5年が経過しますが、ようやく子を授かることができ、執筆時（2021年12月時点）で妊娠8か月となります。掲載される頃はすでに生まれているのでは？と思いますが、今は

不安も楽しみも入り混じった気持ちです。もともと食べることが大好きでしたが、妊娠してからより一層、食に対しての執着が強くなったような気がします（食事の制限や食べてはいけないものなどもあることからでしょうか）。お米マイスター厳選のお米やご飯のおつまみのお取り寄せ、パン作り、パエリア作り、お菓子作り…。意外となんでも手作りできることに気づき、料理は良い気分転換になっている気がします。きっと出産後は育児に追われてこんな余裕はなくなるんだろうなと思ひ、今のうちに好きなことをやっておこうという気持ちもありますが、子供が大きくなったら一緒にお菓子作りしないなあなんて妄想を膨らませております。

拙い文章ではありましたが、お付き合いいただきありがとうございます。新潟大学歯学部や再生医療分野において貢献できるよう精進してまいりますので、今後ともよろしくお願い致します。



高度口腔機能教育研究センター

日吉 巧

令和3年4月1日付で高度口腔機能教育研究センターの特任助教を拝命いたしました、日吉巧（ひよしたくみ）と申します。この度、「素顔拝見」のお話をいただきましたので、この場をお借りして自己紹介いたします。

出身はいわゆる下町と呼ばれる東京都北区です。子供の頃は、犬や金魚、インコといった一般的なペットから、カタツムリや蝶、カエルやダンゴムシといった特殊なペットを十数種類飼育するなど、生き物が大好きな少年でした。また、祖父が静岡で漁業権を持ち、海に潜って魚を銜で突いたり、タコを素手でつかんだり、岩にへばりついたアワビを素手で引きちぎるなどの奇行が大好きで、親を心配させることの多い子供だったと思います。その反動か、今では虫に全く触れられなく

なり、極端な生き物好きが子供に遺伝しないことを祈るばかりです。

中学・高校は駅伝で有名な東洋大学の付属校に通っておりました。どちらも男子校であったため、のびのびとしながらも、むさくるしい環境に青春時代のすべてをささげました。六年間硬式テニスに打ち込み、一度だけ大会で入賞することもできました。一方で、黄色い声援を受ける相手に、試合結果以前の敗北感を覚えることも多かったです。そんな母校は今では跡形もなく取り壊されてしまい、きれいな男女共学の校舎へと変貌を遂げたため、後輩には恨めしさを持っています。

高校卒業後は、歯科医師である父親の背中にあこがれ、46期生として本学歯学部に入りました。11年前の受験当日は市内に81センチの記録的な大雪が降っており、とんでもない大学を受験してしまったと後悔したことを覚えています。大学生活での一番の収穫は、1年の夏に付き合い始めた現在の妻と出会えたことです。付き合い始めの頃は、たくさんの先輩に必ず別れるだろうとの予言をいただきました。当時はなんてひどいことを言う人達だろうと思いましたが、確かに歯学部内の狭い世界では、付き合い続けるカップルはほぼなく、結婚まで至ったのは奇跡と思っております。今では可愛い娘（虫好き）を一人授かり、慣れない子育てに奮闘する毎日を送っています。

もともとは父の医院を継ぎ、臨床的な歯科医師となる以外の選択肢は考えておりませんでした。が、六年生の臨床実習の際に、多部田教授にお声がけいただき、歯周診断・再建学分野にて大学院生となりました。研究は微生物感染症学分野の寺尾教授・土門准教授のご指導の下で行い、研究者としてのイロハを教えてくださいました。その後も様々な良いご縁を、そして多くの支援をいただいで、現在の立場があることに心から感謝しております。

最後となりますが、新潟大学歯学部の発展に寄与できるよう、日々研鑽を積んでまいりたいと考えております。至らぬ点多々あるかと存じますが、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



## う蝕学分野

永田 量子

2021年4月1日付で歯の診療科の助教を拝命いたしました、永田量子と申します。この度、素顔拝見執筆の機会をいただきましたので、この場をお借りして、自己紹介等をさせていただきたいと思っております。

私は、群馬県太田市の生まれで、高校まで実家で過ごしておりました。大学進学は一度東京の美術大学に進学し、そこで4年間ひたすらデザインや絵画、陶芸や金工など多岐にわたる製作活動に勤んでおりました。美術の教師免許も取り、このまま就職かなと思っていましたが、大学4年の夏ごろにふと、この技術は歯科に活かせるのではと思い、新潟の日本歯科大学に入学を決意し、新潟に参りました。第2の大学受験を許してくれた両親には本当に感謝しております。

大学卒業後は新潟大学医歯学総合病院で研修させていただき、そのまま新潟大学大学院に進学させていただきました。もともと、エンド分野にとっても興味があり、大学院ではう蝕学分野を専攻し、野杵教授の元でう蝕治療やう蝕病原細菌に関する知見を深めさせていただきました。大学院在学中は胃がんでお馴染みの*Helicobacter pylori*（ピロリ菌）に関する研究を主に行い、ピロリ菌は以外と歯科分野と関係があることに驚きを感じました。ピロリ菌の培養は癖があってなかなか最初は失敗しましたが、今では、ピロリ菌培養の高みに登りつつあるかもしれません。現在は、口腔と胃のピロリ菌がどのように関係してくるのかを研究中です。

趣味は、絵を描くことはもちろんなのですが、昔から山での魚釣りが好きで（群馬は海がないから…）、最近は阿賀野市や胎内市などに釣りに行くのが楽しいです。釣りに行って、つれた魚をその場で焼いて食べるのは最高です。また、基本的

に暑い時期に行くので汗をかいて、運動した！と気持ちよくなれるのがまたいいですね。岩魚や山女は特に美味しくて、釣るのに頑張った甲斐があったな～とか、山は気持ち良いな～と感動できます。早く新型コロナウイルス収束しないかな…。また、全く方向が違うのですが、半年ほど前に趣味用のPCを購入し、ほぼ毎日いじっています。予想以上に面白いもので、もっと早く買えばよかった…と後悔しています。ただ、ずっとデザインを描くためにMacを使用していたため、

Windowsの操作に慣れなくて、探したいファイルが行方不明になることもしばしばです。冬は雪で外に出られないから、PCで遊ぶぞと今から意気込んでいる次第です。

最後になりましたが、群馬、東京に並ぶ第3の故郷になっている新潟です。現在進行形で体験しているこの環境は2度と得られないもので、貢献という形で新潟に少しずつお返しできたらと考えている次第です。

今後ともどうぞよろしくおねがいいたします。



## Introduction to international students' lives in Niigata

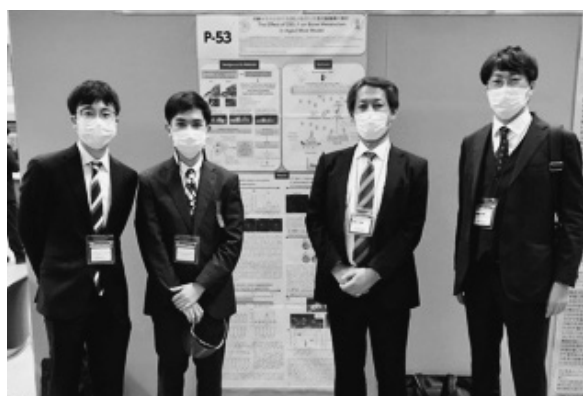
Department of Periodontology  
Kridtapat Sirisereephap (Joke)

I have fled from Thailand and stayed in Niigata for almost a year now at the time I'm writing this article. During the whole time, I'm usually questioned about what it's like to be an international student in Japan? Any recommendations for new international students? Indeed, a lot of stories happened during this time, and I must admit that I need a lot of space to depict them in a clear picture.

To begin with, the hardest thing I could imagine about living here is the process of settling down. Here in Niigata, there are a lot of procedures for international students to settle down at the beginning of their lives here. Several processes, like going to the ward office to inform them of your address, applying for national insurance, tax exemption. Likewise, opening a bank account and registering for a mobile SIM card, all those mentioned above require Japanese language skills to communicate and write the details as well. Luckily, there's a system that provides all international students with a system that provides a tutor to help you with all the required processes. My tutor is the senior dentist in the same department with me. My life would be much more difficult if there were no such thing as a good system and a good tutor like him. I must thank him a mil-

lion times for his generosity, along with all the kindness I received from my seniors, project advisor, teachers, professors and all the Japanese people around me. Even though there are a lot of difficult processes, paperwork, etc., although there's a language barrier, I ensure you that everyone here is willing to help you no matter what it is. Please always keep in mind that you do not have to solve any kind of problem alone.

Another thing that I think you'd be surprised about living in Niigata if you're from any of the tropical countries like me, is Niigata's weather. Here in Niigata, even though we're living in the central area, which is not a mountainous geography like the boundaries of Niigata prefecture, the weather is not only pretty variable, yet also extreme. Last year, I experienced a strong snow storm, icy footpaths, and electrostatic shock during the whole time of winter.





Whereas in the summer, the temperature can reach about 35 degrees Celsius, which is worse than the actual number considering the factor of high humidity of seashore geography, making it feel like 40 degrees Celsius on some days. All of these things make it really easy for you to get sick. Keep in mind that the important thing whilst you're living here is the health of your physical body and mental health as well. Please stay healthy, like the first day you were enriched and delighted by Niigata's beautiful scenery that you might have seen through the Shinkansen window.



Because Japanese language skills are valued in everyday life in Niigata, I strongly advise all international students to enroll in a Japanese language class and/or participate in cultural activities as much as possible. For example, at the Crosspal Niigata, I have been studying Japanese language classes and sometimes I have received great opportunities to attend their cultural

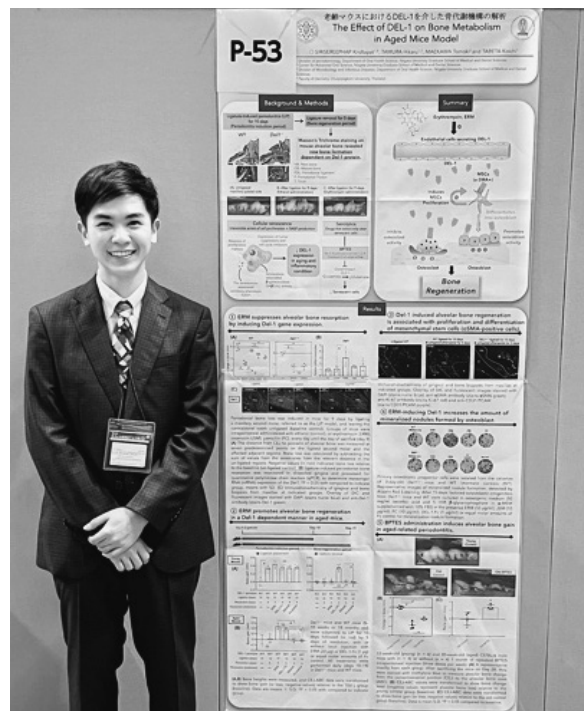


activities, such as, 浴衣で街歩き, which is an activity designed to give you an experience of wearing Yukata and stroll around the Furumachi of Niigata with the guide in Japanese / English narrative. This beautiful area of Niigata has such a long history and such a charming culture reflected through the architecture, national garments, and delicate Niigata cuisine. I do really enjoy learning new things regarding this unique culture, and I think it's worthwhile for any one of you to dive into Japanese culture in the time you spend here as well.

Even though it's quite considered a short time for the time I've just spent here, I might not be a perfect representative of all the international students living here, yet I feel delighted to have received a chance to write this article. However, I only want you all to keep reminding yourself of the goals you had set before living here. Up to this point, and for around 3 years from now, my goals still include trying my best to broaden my specific-field knowledge obtained from all teachers and seniors as much as I can. Nevertheless, I also set a goal of studying Japanese language in order to communicate with Japanese people seamlessly. One thing, which has been told by

all of our faculty's international graduates during their time here, is to balance your work-life balance properly and to enjoy your Niigata life in many aspects as much as possible in order not to regret your time spending here. There is a splendid speech conveyed by an amazing, pretty Filipino senior from the department of surgery, Andrea, at the graduation party before she had to leave Niigata after her graduation. I'll pass through her amazing speech here and hope to see all the new international students enjoying their lives in Niigata like she did.

"I hope that once the time of your turn arrives, you'll realize all the precious moments you'll have spent here, and you'll be able to proudly tell yourself and others that, once in a lifetime moment, Niigata was my home." - Andrea Rei Salazar, 2021.



# My Adventurous Journey: from Golden Land to Land of Sakura

Division of Preventive Dentistry Tin Zar Tun



Hello everyone! Greetings from Niigata!

I am Tin Zar Tun, from Myanmar. But here in Niigata, you can call me Tina as of convenience. My hometown is Yangon (formerly known as Rangoon), the former capital city and the largest city of Myanmar.

Myanmar (once designated as Burma), a southeast Asian nation with major 8-ethnic groups and more than 100 small ethnic groups, is bordered by India, Bangladesh, China, Laos, and Thailand. The majority of Myanmar people are Buddhists amidst with other religions. There is a tropical/subtropical climate with only 3-seasons in Myanmar, the utmost difference with Japan.

In 2011, I graduated (B.D.S.) from the University of Dental Medicine, Yangon. I served as a general dental officer in 500-bedded Patheingyi General Hospital, Aungmye Tharya Division, Myanmar, for 2-year. After clinical practice, I have a chance to serve as a demonstrator in the Department of Preventive and Community Dentistry, University of Dental Medicine, Yangon. I received a master's degree (M.D.Sc) specializing in Paediatric Dentistry in 2017 and continued working as an Assistant Lecturer in the Department of Paediatric Dentistry in the same university.

As Japan is one of the leading countries

that conducted scientific researches, my Professor Sun Sun Win introduced me to the Japanese Government Monbukagakusho: MEXT Scholarship Program by the end of 2018. That is the moment I made up my mind to study in Japan for my future study regardless of Language and cultural differences. After nearly 2-years, I had an opportunity to stay and learn here at the WHO-CC (World Health Organization Collaborating Centres), the division of Preventive Dentistry, Niigata University.

I could learn intensive Japanese courses online from my country before I had a chance to come to Niigata because of the Covid-19 incidence. Moreover, I studied some private Basic Japanese Courses in Myanmar for improving interpersonal communication in Japan.

It was on 5th December 2020 that I was here in Japan for the first time. According to the middle of the peak of the Covid-19 era, I had to stay 14 days quarantine in Narita Mystays hotel. After the quarantine period, my destination to Niigata was arrived by Shinkansen from Tokyo on 20th December 2020. As soon as I arrived at the Niigata





station, Prof. Ogawa and his wife picked me up and treated lunch to me, a heart-warming introduction of Niigata that swiped away my anxiety and worries. Moreover, there was a snow that I would eagerly attract by since my childhood, welcoming me, as I have not been experiencing in touch of snow.

As our department is WHO-CC, a chance to work with an international organization, like WHO, FDI, hit me. Indeed, the contingency of several epidemiological types of research and has come in contact with me.

Under the guidance of the Professor, I participated in a bunch of events that could fulfill my adventurous desire, as in COP 26 (26th United Nations Climate Change Conference).

From my point of view, I have to admit that Japan has a lot of beautiful places amidst rich in traditional cultures that could attract a bunch of foreign people. It is enchanting to see many Japanese young people wearing traditional clothing in various traditional festivals and ceremonies.

To date, I participated in Yukata festivals, and enjoyed wearing Yukata.

In addition, I can experience skiing and

ice skating here, which I was longing for a long time ago.

In Japan, there are different breathtaking scenarios in every season, mainly colorful seasonal flowers. By visiting Echigo Hillside Park, I can witness Japan has charming attractions over me. Moreover, it possesses abundant beautifully fascinating attractions to go around to feel nature. I have been to Sado Island, one of the famous tourist attractions of Niigata in last summer with my friends from other countries.

Apart from the above new experiences, the new inspiration is, I can broaden up my

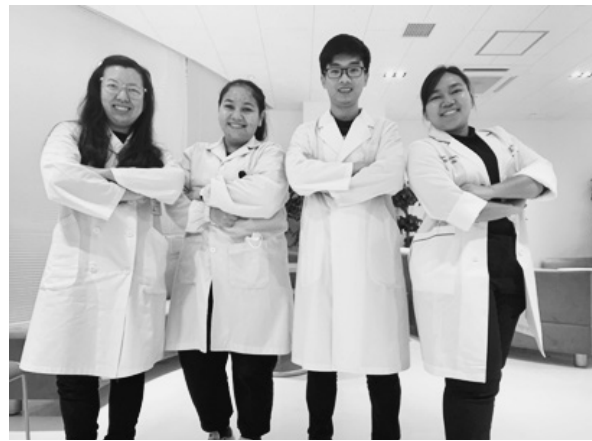






society to an international level. I am grateful to be here because of my kind friends: from different countries with various backgrounds.

For those who stay away from home, it is such a tight condition that we are out of our comfort zone, struggling to be familiar with different weather, cultures, and difficulties in communications. I cannot entirely say that my research journey here is as flat as a pancake. Nonetheless, with the homely support and encouragement from Professors, teachers, friends, colleagues, and staff from Niigata University, I can overcome those obstacles. Finally, I would be very excited to learn and travel around Japan, and I am sure that those enthusiasms would never end.



# Embracing silver linings

Division of Comprehensive Prosthodontics  
Ma. Therese Blanche Sta. Maria

The year 2020 was off to a bad start. Some people said that it was not the year to get everything you want, but the year to appreciate everything you have. Well, not in my case though, because in 2020 I was able to get what I want and still appreciate what I have. I was lucky enough to be given the opportunity to study in Japan. I remember praying fervently on a soul-searching hiking trip in 2019 about my plans of living and studying in Japan. But then COVID-19 happened, and everything went gray. I felt my world crumbled in an instant, while dark clouds loomed over my head. Until one day, I saw some light peeking over the dark gray clouds. The pandemic was not yet over but the world slowly got back up on its feet. And just like a blink of an eye, I found myself living in the Ghibli world.



My name is Ma. Therese Blanche Ortiz Sta. Maria. Okay, I know what you're thinking, my name is way too long. Well, you can call me "Mari" for short. I was born and raised in the Philippines. I must say, Filipinos are very resilient. We don't let the bad things overcome us. We look way past beyond the challenges and see the brighter side in every situation. Have you ever heard about the idiom, "every cloud has a silver lining?" It means that, whenever there is a bad situation (cloud), there is always a positive side to it (silver lining). Why am I telling you this? Because from the past year, I have embraced a lot of silver linings. And I will be telling you tons of it.

Before I moved to Japan, I belonged to my Manila Central University (MCU) family. I earned the degree of Doctor of Dental Medicine from Centro Escolar University, Manila in March 2013, and passed the May 2013 Dentist Licensure Examination. Since I am the youngest faculty member in MCU, College of Dentistry, I was able to learn a lot from my colleagues through the years. My beloved Department of Prosthodontics has enriched my clinical and teaching skills. MCU has developed me to become the person I am now, and I owe this opportunity to them especially to my Dean, Dr. Ma. Cristina Aurea Garcia. I even remember crying in front of her because she asked me the question, "how do you see yourself

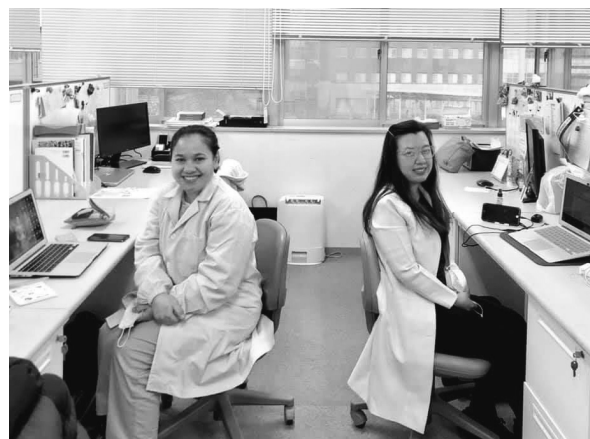


5 years from now,” and I froze because I couldn’t see myself in anything. I just realized now that maybe the reason why I couldn’t see myself in anything because the view was covered in snow. Also, I don’t want to take up my master’s degree, but because she pushed me to do it, I was lucky enough to be given the opportunity to study in Niigata University. Another silver lining well-embraced.

I started my journey as a PhD student in the Division of Comprehensive Prosthodontics led by Professor Takahiro Ono, with my Indonesian friend and research buddy, Pinta. We were able to experience videoendoscopy as a clinician and as a patient with the guidance of Jin Magara Sensei, observe videofluorography with Takanori

Tsujimura Sensei, and assist in numerous experiments inside and outside Niigata University. And you know, I realized that the best thing about doing research, is that it takes you to other places, may it be for experiments or for presentations. It changed the way I looked at the world, and it opened up my mind about so many possibilities and future opportunities.

It was not so long ago when I barely understood the concept of the different possible statistical analyses. We were on the brink of exhaustion looking over the numbers in SPSS when yet again, I saw another silver lining. Because we pushed way past it, Pinta and I were able to start writing our own papers within a short period of time. I was even able to present my paper





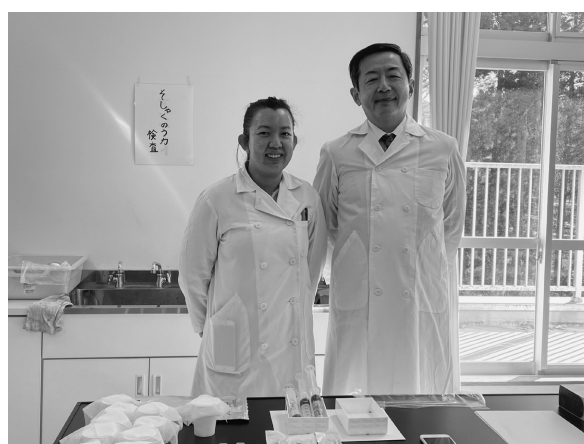
in the Annual Scientific Meeting of Japan Prosthodontic Society Kan-etsu branch last November 7, 2021. This would not have been possible without the mentorship and guidance from Yoko Hasegawa Sensei, Kazuhiro Hori Sensei, Professor Takahiro Ono and our Ihotetsu family.

When I was introduced to them for the first time during the department meeting, it was cold and windy outside, but I felt the warmest greetings they gave me. We are really lucky to be a part of this division, because everyone genuinely helps us in any way they can even if it's something unrelated to PhD life. Settling in Niigata during winter was the hardest part, but with their help, it became easier to adjust.

I have been in Japan for more than a year now, but I can still vividly remember the first day I came to Niigata. As I rode the Shinkansen from Tokyo, the view from the window changed from blue skies and skyscrapers to everything covered in white. The intro song of "Game of Thrones" suddenly played in my mind while the cold shivered down my spine. Feeling a little bit excited, I thought to myself, "winter has come." When I arrived, it was in between 14:00 to 15:00, but the sky was cloudy, dark,

and gloomy, and the wind was blowing me like crazy.

Coming from a very tropical country with 28-32 C temperature, the kid in me danced for joy when I experienced the first snow fall. I was out with my "ate", Andrea, waiting at the bus stop when my world played in slow motion. Little streaks of white filled the running cars and the streets started turning white. Little did I know that it was





going to be the toughest challenge I have to overcome. I was not prepared to be living alone, especially in an excruciatingly cold place like Niigata. Luckily, I have the best Senpais in the world. My “ates” (The Filipino way of saying older sister), Andrea and Simonne, taught me everything I need to know, the places I need to go to, the things I need to buy, the food I must try, to be happy even when it’s gloomy, and most of all, to enjoy what life has to offer. I have never felt sad and lonely because ate Andrea was always there, like my happy pill.

The only things I miss are my mom’s homecooked food, Jollibee, my sister waking me up in the morning, and the bear

hugs from my dogs. Even though ate Andrea has gone back home, I know I can survive three more years because I have made new friends and acquired a new family. Luckily, I have Tina, Quang and Pinta to guide me where to go, literally and figuratively, because I always get lost easily (^\_^). I know they will pull me out when the dark gray clouds above my head had engulfed me.

And as the pandemic loom over with new mutations, we must be strong enough to withstand the challenges that may try to knock us down in the future and embrace its silver linings.



## 培養口腔粘膜上皮細胞の移動速度と細胞増殖能は相関する

生体組織再生工学分野 泉 健次

歯学部ニュース初の試みとして“論文紹介”という稿を執筆させて頂くことになりました。依頼を頂いた時真っ先に思い浮かんだものがあります。ご存知の方も多いと思いますが、ライフサイエンス「新着論文レビュー、First Author's」というDBCLS から発信・公開されていた、トップジャーナルに掲載された日本人著者の生命工学分野の論文について、著者自身の執筆により専門分野の異なる生命科学研究者にむけた日本語レビューでした。Web上に無料で公開されていて、だれでも自由に閲覧・利用できました。残念ながら2019年で更新終了となりましたが、2010年に始まったこのサイトで読んだ論文に刺激を受け、自分自身の実験の参考にしたこともありました。似たような形式でレビュー致します。

干川絵美・泉健次（歯周診断・再建工学分野、生体組織再生工学分野）

Doi: 10.1038/s41598-021-89073-y.

### 要約

物体の追跡や動きの推定などに汎用されるオプティカルフロー（OF）という画像解析技術で、口の粘膜の培養上皮（歯肉）細胞の運動能（移動速度）が顕微鏡下で容易に算出できることがわ

かったので、細胞の移動速度を調べたところ、細胞増殖能と正の相関があることや、上皮再生能も予測可能であることもわかりました。

### はじめに

再生医療は従来の外科的手法や医薬品では治療が困難な臓器の損傷や疾病などを治療できると考えられ、国民の誰もが享受できる治療手段としてさらなる普及が期待されています。再生医療を担う細胞で構成される製品には高い品質管理基準が求められ、製造工程中や最終製品の品質を評価することが重要です。ただ、課題としてナマモノである細胞をどのように評価するかが挙げられます。課題克服のために近年盛んに導入されているのが画像解析技術です。画像解析は非破壊検査なので、検査した細胞を廃棄することなく品質評価が可能となり、その細胞を移植できます本研究グループも、画像解析のみから判定可能な細胞品質評価システムの開発を目指してきました。

### 1. オプティカルフロー（OF）で細胞移動速度を測る

タイムラプス顕微鏡で撮影した画像をつなぎ合わせて動画を作成し、細胞挙動を解析するためにOFというアルゴリズムを利用したところ、細胞

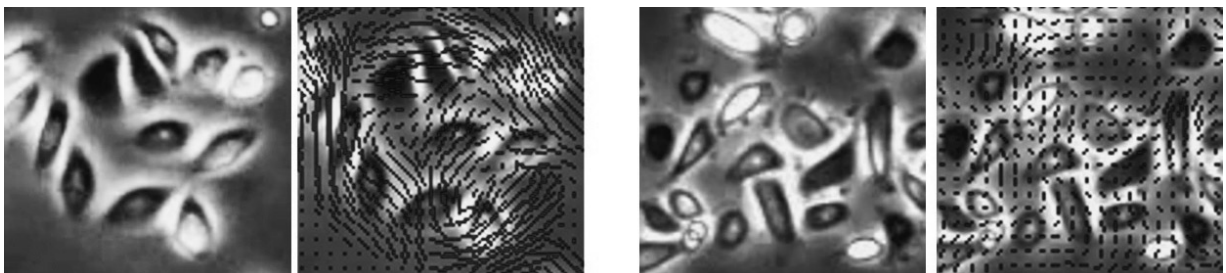


図1 OF解析により、移動速度が速い細胞が撮影されている画像（左）では、遅い細胞の画像（右）より細胞の移動速度を示す矢印が長く示されます

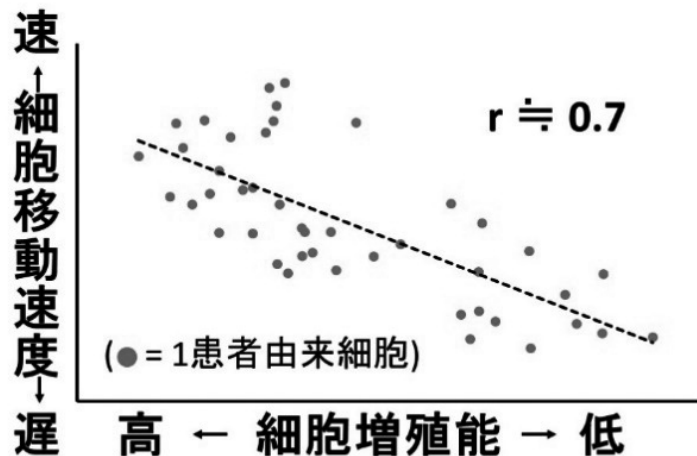


図2 移動速度が速い細胞ほど、細胞増殖能が高いことが示されています

の移動速度（運動能）に関する情報を定量的な数値であらわすことができました（図1）。

## 2. 移動速度の速い細胞は、よく増える

培養口腔粘膜上皮細胞を再生医療に用いる際の基本的特性である細胞増殖能と移動速度を分析した結果、相関関係があることを見出しました（図2）。

## 3. 細胞の移動速度で上皮再生も予測できる

細胞の移動速度によって、口腔粘膜上皮細胞が再生する能力も予測できるかを調べるため、わざと細胞を栄養不足にして実験しました。栄養不足の細胞は移動速度が遅くなり、再生上皮は貧弱だったことで、移動速度から上皮再生も予測できることがわかりました。

## おわりに

OFを用いた解析技術は細胞の“質／能力”を非侵襲的に、つまり細胞を傷つけることなく、技術者の目利きに頼らずに判別するツールとして使えることがわかったことから、細胞増殖能は移動速度を指標とすることで客観的に評価できることが明らかになりました。

この技術を他の種類の培養細胞にも応用することで、非侵襲的かつ定量的に細胞品質評価を行えるツールとして再生医療の発展に寄与することが期待されます。

2020年度に歯学部在籍者がFirst Authorとなっている国際誌での発行論文数は174でした。この記事が論文発行数の増加に少しでも寄与することができたら幸いです。

最後に、本研究に多大なるご貢献を賜りました、本学超域研究機構の佐藤大祐先生に心より感謝申し上げます。

Cells / colony motion of oral keratinocytes determined by non-invasive and quantitative measurement using optical flow predicts epithelial regenerative capacity

Emi Hoshikawa, Taisuke Sato, Kenta Haga, Ayako Suzuki, Ryota Kobayashi, Koichi Tabeta, Kenji Izumi

Sci Rep. 2021 May 17;11(1):10403.

# 学会受賞報告

日本歯科保存学会学術賞

## 日本歯科保存学会学術賞受賞報告

う蝕学分野 竹中彰治

この度、日本歯科保存学会学術賞を受賞しましたので、ご報告いたします。

学術賞は、歯科保存学に関する一連の研究に対する5編の原著論文を対象に審査されます。提出論文は、ビザンチンという糖脂質によるデンタルバイオフィルムの剥離効果の検証と、作用機序の解明を目指した研究です。ビザンチンは、単一の化合物として免疫活性化作用を示す糖脂質トレハロース-6, 6-ジコリノミコレートをリード化合物として、京都薬科大学の小田真隆教授と徳島文理大学の山本博文教授により創製された糖脂質です。免疫賦活剤として開発が進められている本材料を、デンタルバイオフィルムに作用させたところ、「殺さず、剥がす」性質があることを偶然発見しました。歯質への初期定着菌である *Streptococcus* 属の付着およびバイオフィルム形成関連遺伝子の発現を抑制することで、構造が脆弱化することがわかりました。

う蝕は、バイオフィルム感染症であり生活習慣病です。私は「デンタルバイオフィルムとの共存」をコンセプトに、殺菌ではなく、“口腔細菌叢を変動させずにバイオフィルム構造を分解す

る”新しい制御戦略の開発に取り組んできました。臨床応用へ向けて開発研究を進めていきます。最後に、研究遂行にご指導賜りました野杵由一郎教授、ビザンチンを知るきっかけとなった小田真隆教授、山本博文教授、論文の質の向上に多くの助言をくださいました寺尾豊教授、土門久哲准教授に改めて御礼申し上げます。



野杵由一郎教授（左）と筆者（右）



## 学会受賞報告

う蝕学分野 枝 並 直 樹

この度、日本歯科保存学会奨励賞を頂戴いたしましたのでご報告させていただきます。この賞は歯科保存学の領域において優れた業績をあげた若手会員を表彰するもので、今回の受賞を非常に光栄に思っております。選考の対象となった論文はリバスキラリゼーション（歯髄血管再生療法）について報告したものでした。近年、リバスキラリゼーションは根未完成歯の新たな歯内療法として非常に注目を集めています。この治療法では、根尖組織からの血液で根管を満たすことにより、失活した根未完成歯に新生歯髄様組織の形成を促すことができます。非常に画期的な治療法ですが、その治癒メカニズムは不明な点が多く残されています。

今回、私たちはラットに実験的リバスキラリゼーションを行うことによって、術前の根尖部組織の残存具合が治癒形態を4パターンに分けることを初めて明らかにしました（Scientific Reports, 2020, 10:20967）。本研究結果は、歯髄壊死が生じた根未完成歯を確実に最良の治癒形態、すなわち歯髄象牙質複合体の再生に導くための一助になると考えています。

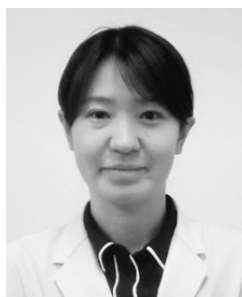
今後は歯髄細胞・歯根膜細胞・上皮細胞間の相互作用に着目し、より詳細な治癒メカニズムの解明を行う予定です。最後になりましたが、本研究の遂行を支えてくださった多くの方々に感謝申し上げます。



野村由一郎教授との記念写真

## 第13回日本歯科医学教育学会国際学会研究発表 奨励賞 受賞報告

生体歯科補綴学分野 長 澤 麻沙子



この度、日本歯科医学教育学会より光栄な賞をいただきましたのでご報告させていただきます。この賞は日本の歯科医学教育に関する研究成果を海外で開催される国際学会において発表

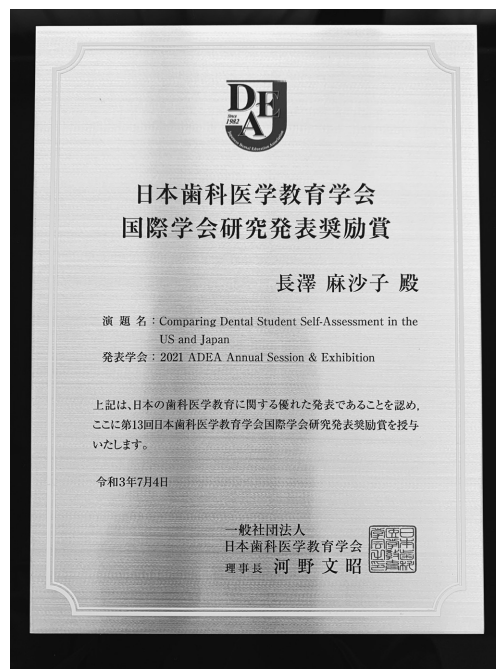
することにより、世界への情報発信を奨励することを目的としたもので、日本以外の国で開催される国際学術大会において日本の歯科医学教育に関する優れた発表を行った者に贈られるものとなっております。

今回は2021 American Dental Education Association (ADEA) Annual Session & Exhibition (アメリカ歯科医学教育学会学術大会) にて「Comparing Dental Student Self-Assessment in the US and Japan」と題したポスター発表を行い、この度の受賞となりました。新型コロナウイルスの影響でWEB開催でしたが、発表は1時間程度ライブで行いました。時差の関係で日本の深夜から朝方にかけて行いましたので、少し辛かったです。アメリカに行かなくても現地の方とディスカッションができましたのでとても有意義な時間を過ごせました。

本研究は文化の異なるアメリカと日本の自己評価能力を比較することを目的としており、国際的な傾向を理解し、ダイバーシティを考慮した学習ニーズに注目しています。非常に興味深いデータ

が生まれたので、是非ご覧になってみてください。Comparing dental student preclinical self-assessment in the United States and Japan. J Dent Educ. 2021 Aug 26. doi: 10.1002/jdd.12779.

最後になりましたが、ご指導くださいましたハーバード大学歯学部大山弘枝先生、当分野の魚島勝美教授をはじめ他共同研究者の先生方にはこの場をお借りして心より御礼申し上げます。今後ともご指導の程何卒よろしくお願い申し上げます。



表彰楯

## 2nd World Dysphagia Summit, Oral presentation award 受賞報告

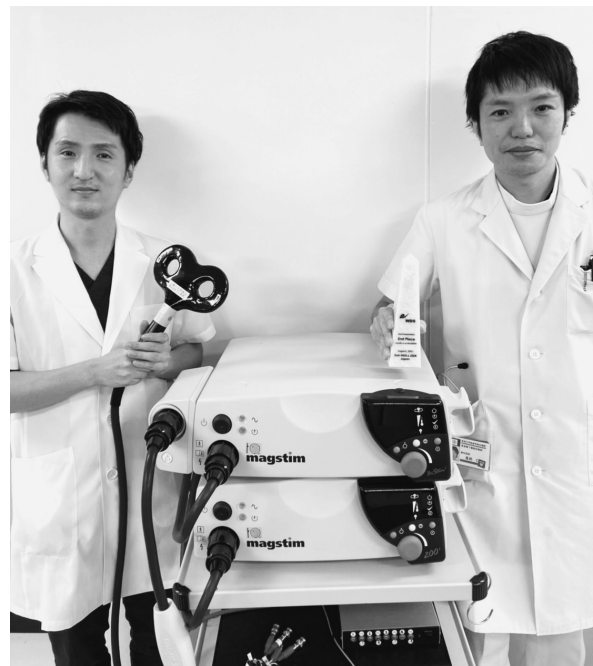
摂食嚥下リハビリテーション学分野 真 柄 仁

2nd World Dysphagia Summit (2021年8月20-22日、名古屋／オンラインにて開催)において、Oral presentation awardに選出いただきました。受賞演題名は、「Modulation of swallowing related motor evoked potentials induced by interferential current stimulation、干渉波刺激に伴う嚥下運動誘発電位の変調効果」で、本受賞内容を紹介させていただきます。

摂食嚥下障害は、脳血管障害、神経変性疾患、頭頸部腫瘍等の疾患を背景に、運動感覚機能が障害されることにより生じます。その障害へ対応するリハビリテーションとしては運動療法が基本となりますが、近年、電気刺激などの末梢感覚刺激の有用性が注目されています。本研究は、電気刺激の一つである干渉波刺激を一定時間適応することで、嚥下関連運動神経領域に有意な興奮性をもたらしたことを、経頭蓋磁気刺激装置で評価しました。摂食嚥下リハビリテーションは経験的な臨床論が先行し、その根拠が十分でないものが多く、嚥下運動に関わる神経制御機構や、リハビリテーション効果の理解を深める基礎科学研究が求められています。摂食嚥下障害の臨床、研究、教育の発展と普及という共通の理念を持つ日本摂食嚥下リハビリテーション学会、米国のDysphagia Research Society、欧州のEuropean Society

for Swallowing Disordersの3団体が設立したWorld Dysphagia Summitという国際学会の場で、そのような一側面も評価頂いたものと感じております。

最後に、本研究の遂行にあたり、御指導を賜りました新潟大学大学院摂食嚥下リハビリテーション学分野の井上誠教授、協力頂きました被検者の皆様にこの場をお借りして感謝申し上げます。



筆者は右

## 第21回 歯科基礎医学会ライオン学術賞 受賞報告

硬組織形態学分野 依田 浩子

この度、第21回（2021年度）歯科基礎医学会ライオン学術賞を受賞いたしましたので、ご報告させていただきます。本賞は「歯科基礎医学分野において、国際レベルの卓越した研究成果を挙げ、歯科医学の発展・進歩に多大に寄与した功績を称える」という主旨の学術賞で、この大変名誉ある賞を受賞できたことは、研究者としてこの上ない喜びです。

今回の受賞題目は「細胞内外環境による硬組織形成細胞の分化誘導機構の解明」で、細胞内エネルギー代謝の主軸である糖代謝調節や、細胞外を取り巻く細胞外基質の改変により、歯・軟骨・骨組織の発育が制御されるメカニズムの一端を明らかにすることができました。

新潟大学歯学部での本賞受賞は、前田健康教授（第1回）、寺尾豊教授（第13回）に次いで3人目となり、本学歯学部の研究力の高さを国内外に示すことができたことは、大変喜ばしいことと思っております。基礎研究は地道な作業の連続ですが、着実に努力を積み重ねていくことで、未知の事象を発見することができ、とてもエキサイティングで魅力的な分野です。今後は学部学生の皆さ

んや若手研究者の先生方に基礎研究の魅力を伝えていくことが自分の使命であると感じています。

最後になりますが、私を研究者として育ててくださった恩師の朔 敬名誉教授、研究を支えていただいた硬組織形態学分野の大島勇人教授および教室員の皆様、共同研究者の先生方に心より感謝申し上げます。





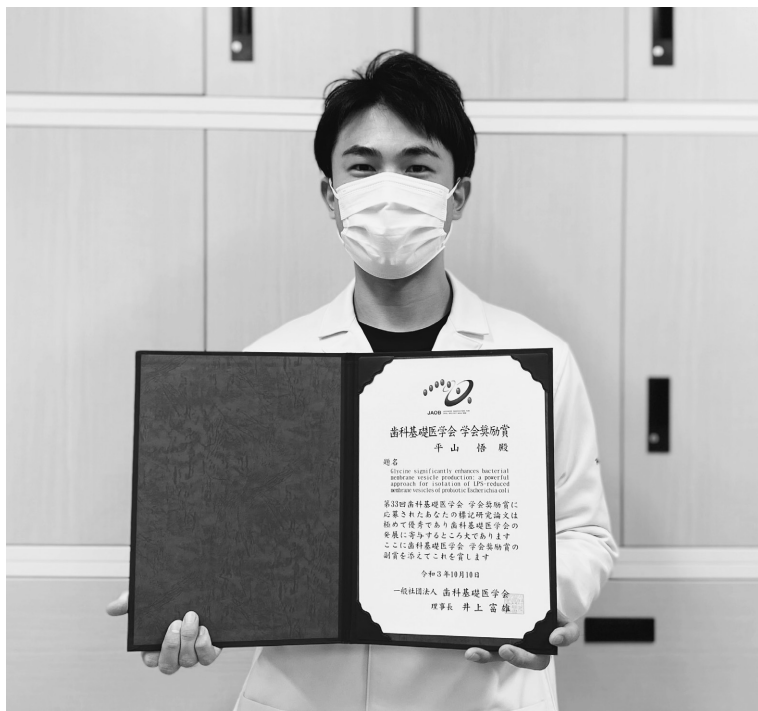
## 第33回 歯科基礎医学会 学会奨励賞 受賞報告

微生物感染症学分野 平山 悟

この度、歯科基礎医学会の学会奨励賞（微生物学部門）を受賞いたしました。本賞は歯科基礎医学や関連領域の研究に関する論文に贈られるものです。私の論文は『Glycine significantly enhances bacterial membrane vesicle production: a powerful approach for isolation of LPS-reduced membrane vesicles of probiotic *Escherichia coli*』というタイトルで、細菌のメンブレンベシクルと呼ばれる膜小胞についての研究報告であり、以前に勤めていた国立感染症研究所で行ったものです。本研究では、大腸菌のメンブレンベシクル産生量をグリシンによって顕著に増加できることを見出しました。ま

た、グリシン誘導ベシクルが有する免疫誘導能やアジュバント活性といった機能性が、非誘導ベシクルと同等であることを示しました。この特性を利用して、歯周病原細菌の抗原とともに大腸菌のグリシン誘導ベシクルをマウスに接種することで、歯周病原細菌に対する抗体産生を顕著に誘導することにも成功しています。

感染研の中尾龍馬先生には、本研究で大変お世話になりました。また、学会奨励賞に推薦していただきました本学寺尾豊先生や、土門久哲先生をはじめ微生物感染症学分野の皆様感謝申し上げます。



## 診療支援部だより

診療支援部歯科衛生部門 坂本 裕里子

はじめまして。診療支援部歯科衛生士の坂本裕里子と申します。

現在、歯科衛生士は26名が在籍しています。それぞれ各ブロックに分かれ業務を行っています。入職して早くも6年が経ち、3ブロック、5ブロックの配属を経験しました。

現在は4ブロックの「小児・障がい者歯科、矯正歯科」で慌ただしい毎日を送っています。最初は初めてのことが多く、子供は苦手だったのもあり、戸惑うことも多くありました。4ブロック配属になり、たくさんの刺激をもらい、考え方が変化した部分があります。それは、できて当たり前ではなく、「ひとりひとり違っていい、個性を大事にする」ということです。何人もの患者さんと接し、泣きながら治療を頑張り、次には泣かずにできるようになり、できることがどんどん増え、日々成長していく姿を目にします。そのスピードはそれぞれ違い、みんなそれぞれ個性があり、ゴールが違います。同じ方法は通用しない事も多く、どう向きあって、一緒に考えて、どう伝えるか…とても難しいことですがやりがいを感じています。一緒に手を取り目標を達成する、その環境作りすることがとても大切だと思います。ここでは患者本人だけでなく、家族や施設の方とのコミュニケーションも重要になります。患者、家族、歯科医師、歯科衛生士がチームで日々奮闘しています。歯科衛生士として、口腔管理だけでなく、患者に寄り添える存在になることが大事だと強く感じるようになりました。そして子供は苦手と言いつつも、なんだかんだ一緒に笑って楽しんでいる自分が今はいます。矯正治療の患者さんにいかに日々のケアが重要かを伝えるのも歯科衛生士の大切な役割です。矯正治療は長期戦であ

り、ひとりひとりの患者さんに目を向け、その人に合った方法でモチベーションを上げることは歯科衛生士の私たちの役目だと思います。

4ブロックはスタッフも個性強めです！いい意味でみんなお節介です♡それぞれが自分の役割を持って、フォローし足りない部分を補っています(私はせっかち、スパルタ担当ですかね？笑)。自分を認めてくれ、たわいもない会話ができるこの環境はとても恵まれていると思います。本当に先生方、スタッフのみなさんに毎日助けられています。先生方の診療がスムーズに進むように広い視野を持ち、これからも頑張りたいと思います。

最近は毎日送られてくる甥っ子の写真や動画に癒されています。なかなか会えないですがこれからの成長が楽しみです。今、色々なことが制限され苦しい毎日を送っていると思います。今この環境だからこそできること、大切にしなければいけない事があると思います。毎日アドバイスや相談にのってくれる先輩方、くだらない私の話に付き合ってくれる後輩には感謝しています。みなさま今後ともよろしくお願いいたします。



4ブロックスタッフと筆者は左

# 新潟歯学会報告

## 令和3年度 新潟歯学会例会報告

令和3年度新潟歯学会集会幹事  
摂食嚥下リハビリテーション学分野  
辻村 恭憲

令和3年度新潟歯学会第1回例会が7月10日（土）に、第2回例会が11月6日（土）に、新潟医療人育成センターにて開催されました。第1回例会では、11題の一般口演と多部田康一先生（歯周診断・再建学分野）による教授就任講演（演題名：歯周病学・歯周治療学の現在と展望）が行われ、115名（会場77名、Zoom38名）が参加されました。第2回例会では、14演題の一般口演が行われ、89名（会場69名、Zoom20名）が参加されました。座長をお引き受けいただいた先生方、演者および参加された会員の皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けたこの2年間、歯学部講堂が使用できなかった

め、会場を新潟医療人育成センターに変更した上で、現地参加を演者と評議員に制限せざるを得ませんでした。その一方、多くの学術大会がオンライン開催となっていたなかでも、演者の先生方に会場で発表を行っていただけたことは、とても有意義であったと感じています。会員の皆様にご協力いただき、大きなトラブルなく集会を開催できましたこと、心より感謝しております。

令和4年度からは、小児歯科学分野が集会係担当となります。新潟歯学会に関する詳しい情報は新潟歯学会ホームページをご覧ください（<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/nds/index-j.html>）。



教授就任講演 多部田康一先生



質疑の様子（第1回例会）



発表の様子（第2回例会）



# 同窓会だより

## 同窓会だより

副会長 野内 昭宏

新潟大学歯学部は昭和40年4月に設置されました。昭和46年3月に歯学科1期生が卒業しました。それから程なくして、歯学部同窓会が創立されました。そして50余年を経て、この春には歯学科52期生と口腔生命福祉学科15期生が卒業します。彼ら・彼女らを含めると、これまでに約3,000名の卒業生（同窓生）が輩出されています。

同窓生は時代にふさわしい活躍が求められている中、活躍の場を日本のみならず世界に求めている

方もいます。また、大学教授も延べ67名輩出されていて、各部署でのリーダーや、次世代への指導者たる役割が期待されています。

そんな中、11月には防衛医科大学校名誉教授の佐藤泰則先生（歯学科5期生）が、秋の叙勲で瑞宝中綬章を受章されました。当会からも祝意をお伝えしました。

歯学部同窓会も創立50周年を迎えます。2022年7月には記念事業を行う予定で、現在準備を進めています。ご興味のある方は、同窓会事務局までお問い合わせください。



叙勲のお祝いに佐藤先生に贈られたMade in NIIGATAのチタン製カップ







# 同窓会セミナーを受講して

歯学科21期生 小澤 賢一

今回の新潟大学歯学部同窓会学術セミナーは「歯科治療中の呼吸困難」ということで、通常の歯科診療下でほとんど経験した事のない僕にとっては興味深いテーマでした。

また瀬尾憲司教授は30年程前の学生時代に臨床実習の際にご指導頂いた記憶があり、大変懐かしい想いととも、またこのような形で講義を受けられる事をとても楽しみにしておりました。

セミナーでは呼吸困難の発生機序やその定義、種類などの分類と共に、いつの時点から呼吸異常があったのかを知る事が重要であるとのことでしたが、毎日の診療行為の中では麻酔や歯科処置中の異常には気を付けているつもりですが、歯科医院への到着時・チェアに座った時・治療中・治療後とステージ毎に分けて考えることが大事であると思いました。

また呼吸困難をきたす疾患として呼吸器疾患・循環器疾患・神経疾患・廃用症候群などがあり、心停止となる場合にも呼吸数に異常がみられる事からパルスオキシメーターの有用性があると説明がありました。パルスオキシメーターは新型コロナウイルスの際にハッピーハイポキシアで話題と

なっておりましたが、心停止の際にタイムラグがある事には驚きました。

そして咽頭落下やアレルギー・喘息発作・過換気の際の対応動画を拝見しましたが、動画での講義はとても解りやすいものでした。その中で自分は過換気の際は再呼吸を促せば直ぐに回復すると思っておりましたが、時間がかかるということを知り過呼吸に対する認識が変わりました。

さらにケーススタディでは、刻々変化するモニターを見ながらの原因解析や対応方法について実習さながらの臨場感溢れるもので、実際に事例が起きた時とにかく対応する事と呼吸数の把握が重要であると痛感しました。

歯科治療の際の呼吸困難に対する認識がアナフィラキシーや迷走神経反射にフォーカスしていた自分にとっては今回のセミナーが知識の幅を広げると共に、歯科治療中のみならず患者さんが歯科医院に到着してから帰宅する迄、患者さんのモニタリング・全身状態の観察把握をする「歯科全身管理」が改めて重要であると再認識しました。

最後になりますが、コロナ禍の中でも学びの機会を提供して頂きました同窓会学術担当の先生方に感謝すると共に、このような状況下で日々診療にあたられている同窓会員の先生方のご活躍を祈念します。来年度は是非リアルで学術講演会に参加させて頂きたいと思っております。



## 歯学部を支える方々

### 青天の霹靂

歯学部事務室総務係 丸山 俊

歯学部総務係の丸山 俊（まるやま すぐる）と申します。令和2年4月に歯学部へ異動して参りました。採用は平成21年4月で、病院に3年、その後財務部に8年おりました。

歯学部へ異動してきて早1年半以上が過ぎましたが、本当にあっという間です。そもそも異動になると思っておらず、報せを聞いたときは正に青天の霹靂。しかも「歯学部総務係長」とのこと。最初は上手く脳内で変換できず、「シガクブソウムカカリチョウ」状態。そんな状態のまま今に至っており、いまだ混乱の渦中にある気分です。

現在の業務内容としては、予算などの会計関係業務と、人事などの庶務関係業務が半々といったところ。冒頭に述べたとおり、財務部に在籍した経験から会計関係の業務は多少分かるのですが、庶務関係は全くの初体験。未知の言葉、未知の手続き、未知の書類に囲まれ、埋もれながら日々を過ごしています。

さて、歯学部に来て、事前情報と違うと感じる

ことがあります。それは、「海外出張がない」ということです。まだ財務部にいたころ、歯学部といえば国際交流が盛んで、教員、事務職員、学生が毎月のように海外出張をしている…と聞いていました。

ところが、私が異動してきてからというもの、新型コロナウイルスの影響で海外どころか国内の出張も少なく、若干の戸惑いを覚えています。このままでは、歯学部へ異動してきたのに一度も海外出張を経験しないままお払い箱になってしまうのではないかと…という危機感を抱いております。

とはいえ、いつか新型コロナウイルスが収束し、歯学部が本来の姿を取り戻すとき、少しでも歯学部の役に立てるように力を蓄える期間が今のだと自分に言い聞かせ、日々勉強することになっています。

至らぬ点が多く、ご迷惑をおかけしては反省を繰り返す日々です。これからもご迷惑をおかけするかもしれませんが、よろしくご指導・ご鞭撻のほどお願いいたします。



歯学部事務室にて

## 2年が経過し思うこと

歯学部事務室学務係 土田 彩乃

現在、採用5年目となりました土田と申します。歯学部学務係へは令和2年4月に異動となり、すでに2年が経とうとしています。以前は財務部に配属され、入学料の徴収や授業料の督促、収入決算といった学納金の担当をしておりました。前の部署でも歯学部ニュースが回覧されており、異動する際は「歯学部ニュース楽しみにしていますね」と声をかけてもらうこともありました。

さて、歯学部1年目では大学院の担当として学位論文審査や留学生の支援関係などを担当しました。現在は、学部の担当として時間割の作成やオープンキャンパスの実施、学部案内の作成、卒業判定や進級判定といった業務をしており、学部

と大学院どちらも経験させてもらえる貴重な機会をいただいております。2年が経つと、実習室等から聞こえてくる苦手だった歯医者さん特有の金属器具の音にすっかり慣れてしまい、今は全く平気になりました。また、先生方が熱心に指導に励む姿や学生の勉学に一生懸命に取り組んでいる姿に自分も頑張ろうと刺激を受け、日々の業務にあたることができます。

今後も先生方の教育活動の補助や、学生生活のサポートができるようこの恵まれた環境で日々精進していけたらと思っております。何かお気づきの点がありましたら、遠慮なく学務係へお越しください。



中堅職員研修にて同期と撮影

# 教 職 員 異 動

## 学 部

### 【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
採用	R3.9.1	竹原 祥子	予防歯科学分野准教授	東京女子医科大学医学部
昇任	R3.9.1	丹原 惇	歯科矯正学分野講師	歯科矯正学分野助教
採用	R3.9.1	北見 恩美	高度口腔機能教育研究センター特任助教	歯科薬理学分野特任助教
昇任	R3.10.1	野中 由香莉	歯周病科講師	歯周診断・再建学分野助教
退職	R3.9.30	勝見 祐二		顎顔面口腔外科学分野助教

## 病 院

### 【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	R3.8.1	鈴木 拓	摂食嚥下機能回復部助教	
採用	R3.9.1	佐藤 圭祐	歯周病科助教	歯周病科医員
退職	R3.9.30	曾我 麻里恵		医療連携口腔管理治療部特任助教
昇任	R3.10.1	野中 由香莉	歯周病科講師	医歯学系（歯周診断・再建学）助教

### 【看護・診療支援部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
所属換	R3.7.4	佐藤 夕夏	東11階病棟看護師	東3階病棟看護師
育児休業	R3.7.7	堀 舞		東3階病棟看護師
育児休業復帰・所属換	R3.7.14	遠藤 七瀬	東8階病棟看護師	東3階病棟看護師
育児休業	R3.7.31	水戸部 恵実		東3階病棟看護師



異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
所属換	R3.8.1	原 田 映 輝	東11階病棟看護師	東3階病棟看護師
所属換	R3.8.1	佐 藤 夕 夏	東3階病棟看護師	東11階病棟看護師
育児休業	R3.8.4	五十田 緋奈野		東3階病棟看護師
退職	R3.8.13	齋 藤 遥 奈		東3階病棟看護師
育児休業	R3.8.20	佐々木 潤 美		東3階病棟看護師
所属換	R3.8.29	原 田 映 輝	東3階病棟看護師	東11階病棟看護師
所属換	R3.9.26	宮 内 貴 未	東11階病棟看護師	東3階病棟看護師
所属換	R3.11.21	藤 野 あかり	東11階病棟看護師	東3階病棟看護師
所属換	R3.11.21	宮 内 貴 未	東3階病棟看護師	東11階病棟看護師

### 【事務部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
配置換	R3.10.1	平 賀 智 之	医歯学系総務課庶務係長	医事課医療安全係長
配置換	R3.10.1	倉 田 貴 浩	医事課医療安全係長	医歯学系総務課庶務係長



## 編集後記

この度はお忙しい中、原稿の執筆にご協力いただきました先生、学生の皆様はこの場をお借りして心よりお礼申し上げます。歯学部ニュースの編集に微力ながら関わらせていただき、大変良い経験になりました。コロナ禍で先の見えない不安が広がる中、多くの方の新たな旅立ちや活躍の知らせが、同窓の先生方の希望の一つとなることを願っております。今後も歯学部ニュースが、だれかの気持ちを明るくできる情報発信の場であることを期待したいと思います。

歯科矯正学 北見 公平

この度はお忙しい中、原稿執筆に快くご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。歯学部ニュースの編集に携わらせていただくのは初めてでしたが、多くの方のご協力のもとに発行されていることが改めてわかる良い機会となりました。コロナ禍の影響で編集も全てメールでのやりとりのみで進行しましたが、大きな問題もなく発行され嬉しく思います。歯学部ニュースは毎号情報量が多く、私も楽しく読ませていただいておりますが、本冊子が皆様に役立つ何かをお伝えできましたら幸いです。

歯科総合診療科 中村 太

原稿執筆を依頼する立場として、今回はじめて歯学部ニュース作製に関わる事となり、改めて多くの教員の先生方の尽力によって作りあげられた冊子であると認識致しました。

本冊子は本学の活動歴や教員の先生方を知る貴重な情報源であり、さらにコロナ禍で対面での交流が制限される昨今において、その価値を実感できたのではないかと思います。今後も新潟大学歯学部内の活動を内外に発信する広報誌としての役割を願い、次号以降も楽しみにしております。

顎顔面口腔外科学 永井 孝宏

歯学部ニュースは学生の頃より楽しく拝読しておりましたが、今回初めて編集に携わらせていただき、多くの方々のご尽力のもと出来上がっているのだと実感できた良い経験となりました。学生さんや研修医の先生方にはコロナ禍でいろいろな制限のある中での生活の様子を寄稿いただきましたが、同じくコロナ禍で学生生活を送る後輩読者への励ましになるのではと感じました。執筆を快くお引き受けいただいた皆様に感謝申し上げます。

小児歯科・障がい者歯科 花崎 美華

この度、歯学部ニュース140号の編集長を務めさせていただきました。この編集作業を行っている期間中は、新型コロナウイルスも第5波後に一度落ち着きを見せたかのように見られましたが、その後すぐに変異株への予断を許さない状況が続いています。新潟大学歯学部では、コロナ禍の状況を見極めながら感染対策を行った上で、授業に取り組んでいます。本号では、“Beyondコロナ”という特集を組み、コロナ禍での臨床実習や就職活動に学生がどう取り組んでいるかを紹介させていただきました。少しでも学生の様子が伝われば幸いです。ご多忙の中、ご寄稿下さった方々、編集委員の先生方、また読んでいただいた皆様に心から感謝申し上げます。

口腔生命福祉学 米澤 大輔

## 歯学部ニュース

令和3年度第2号（通算140号）

発行日 令和4年3月4日  
発行者 新潟大学歯学部広報委員会  
編集責任者 米澤 大輔、寺尾 豊  
編集委員 北見 公平、中村 太  
永井 孝宏、花崎 美華  
印刷所 (株)ウィザップ

#### 表紙・裏表紙写真の説明

##### 表紙の撮影データ

撮 影 地：阿賀野市

撮 影 日：2022年2月

使用機材：OLYMPUS PEN-F／M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO／  
絞り：F5.6・シャッター速度：1,600分の1秒

##### 裏表紙の撮影データ

撮 影 地：新発田市

撮 影 日：2022年2月

使用機材：OLYMPUS E-M5 Mark II／M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm  
F4.0 IS PRO／絞り：F4・シャッター速度：1,600分の1秒

コメント：今号では新潟の雪景色でまとめてみました。表紙はお馴染みの瓢湖ですが、手前に白鳥と鴨の群れ、背景に白銀の山並みを配置できるように、歩道橋の上から中望遠（35mm判換算90mm相当）の焦点距離のレンズで構図を決めたところ、たまたまシャッターを切るタイミングで、一羽の鳩がフレームに飛び込んできていました。裏表紙はスキー場から水墨画のような冬山の風景を狙って望遠（35mm判換算200mm相当）で撮影したのですが、いずれも偶然ですが二王子岳の方向にレンズを向ける結果となりました。

##### 本誌中の写真の使用機材

ボ デ ィ：OLYMPUS PEN-F, OLYMPUS E-M5 Mark II

レ ン ズ：M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO, M.ZUIKO DIGITAL  
ED 12-100mm F4.0 IS PRO

撮 影 者：林 孝文





リサイクル適性 

この印刷物は、印刷用の紙へ  
リサイクルできます。